

## 1860年代前半のマルクスの地代論研究

——61-63年草稿、『資本論』第三部主要原稿第6章（65年）および  
関連抜粋ノート（リービッツの農業化学）を中心に——（2）

竹 永 進

### 内容目次

#### 1. はじめに——前史から

- a. ジェームズ・アンダーソンとの出会い ——1845年の「マンチェスターノート」
- b. プルードン批判とリカードの地代理論 ——『哲学の貧困』（1847年）
- c. 1850年代初頭の「ロンドン・経済学ノート」における地代・農業（化学）研究  
——リービッツ、ジョンストンとの出会い
- d. 1850年代初頭のマルクスの地代論 ——エンゲルス宛の手紙
- e. ロートベルトゥス
- f. 「経済学批判」の体系プランにおける土地所有（地代）の理論

#### 2. 1861-63年草稿におけるマルクスの地代（論）研究 ——絶対地代と差額地代——

- a. 「5 剰余価値に関する諸学説」へのロートベルトゥスの地代論の「闖入」
- b. 資本主義における工業と農業、剰余価値と利潤
- c. 価値と生産価格、農業
- d. 農業における資本の構成、ロートベルトゥスの「新しい地代理論」

（以上前号）

- e. 絶対地代と差額地代
- f. アンダーソン、マルサス、リカード
- g. アンダーソンとマルクスの差額地代論
- h. 地代論の位置、「例証」から「転化」へ

#### 3. マルクスの地代論の構造とリービッツの農業化学 ——『資本論』第三部「主要原稿」第6章——

- a. 「主要原稿」第6章の執筆
- b. 1865年のマルクスの抜粋ノート

（以上本号 以下続く）

- c. リービッツからの抜粋、新しい農業化学
- d. 「主要原稿」第6章の地代理論
  - i) 「a. 緒論」
  - ii) 「c. 絶対地代」
  - iii) 「b. 差額地代」、差額地代 I
  - iv) 「b. 差額地代」、差額地代 II

#### 4. むすびにかえて——『資本論』第一部刊行後の地代論研究

参考文献目録

## e. 絶対地代と差額地代

ところで、これまでに見てきたように、リカードの地代理論を批判して彼の理論ではその存在すら想定されていなかった新たな地代の理論を作り出すにあたって、マルクスはリカードの言う地代も彼が新たに構想している地代もいずれも単に「地代」とだけ呼んでいる。しかしきわめて性格の異なる二つの地代が存在することが明確になった今、マルクスはこの二つを名称の上でも区別して議論の混乱を防ぐ必要を感じたのではないかと思われる。実際、ロートベルトゥスの著作を手掛かりにして農業における超過利潤の存在理由について論じたすぐ後にふたたびリカードに立ち帰って次のように述べ、それまで彼自身（だけでなく恐らく他のだれも）一度も使ったことのなかった新しい用語を導入している：「このように修正すれば、その事柄は正しい。それは地代の存在を明らかにするのであるが、ところがリカードは、ただ差額地代の存在を明らかにするだけで、土地所有には事実上経済的効果はないとしているのである。」(II/3.3.S.749. 強調は原文) ここでマルクスは初めて「差額地代」という、それまで使ったことのなかった用語を新たに作り出している。最初に「それは地代の存在を明らかにする」と言われているときの「地代」とは、明らかにリカードの理論における地代とは異質なものである。マルクスは、リカードの言う地代をこれと区別するために、「リカードは、ただ差額地代の存在を明らかにするだけ」だと言っているのである<sup>(1)</sup>。ここでマルクスが単に「地代」とだけ呼んでいるものは、実際には彼自身がその存在を理論的に示したばかりの新しい形態の地代であり、リカードの地代概念に対して「差額地代」という新しい用語が振り当てられると、これと双対的にこのマルクスの新しい地代概念も新たな用語をもって呼び両者を区別しうるようにすることが求

---

(1) マルクスはこの引用文の最後に、リカードの差額地代の理論においては「土地所有には事実上経済的効果はない」とされる、と言う。これは差額地代論で土地所有が演じる役割についての的確な認識である。差額地代の元となる超過利潤は、生産性の程度の相違を解消することの困難な土地という生産手段が不可欠であれば、その土地が私有地であってもなくても発生する。この限りではマルクスがここで述べていることが妥当する。土地所有者が地代という形でこの超過利潤を取得することは、土地所有の有無とは独立にこの超過利潤の発生を論理的に前提してはじめて可能となる。ところが、マルクスがこれまで論じてきた新しい形態の地代では、その元本となる超過利潤そのものが土地所有者によるその地代としての取得を目的とした農産物価格の引き上げによってはじめて発生するのであり、超過利潤の発生と取得が不可分の関係にありそこで土地所有の演じる役割は決定的である。マルクスの最後の文言はこのような両地代形態の相違を捉えていると理解しうであらう。

められたであろう。

マルクスは「差額地代」という用語が初めてつかわれている上の引用文のすこし後で、再びロートベルトゥスの地代理論の批判的吟味に戻り、彼が農業では原料が価値計算に入れられることなく用いられるという点を批判しつつ、それでも農業部門の工業部門とは区別される特質から地代が発生することを次のように説明する：農業では「不変資本に対する可変資本の割合が、工業の特殊な生産部面のそれではなく工業の平均的なそれよりも大きい。この一般的な相違の大きさが、第I号地〔最劣等地〕における地代の、すなわち差額地代ではなく絶対地代したがって最小の地代の、大きさとその存在とを規定するのである。」（ebenda,S.754. 強調は原文）マルクスはここではじめて、「差額地代」ではない地代に対して「絶対地代」<sup>(2)</sup>という新しい呼び名を与えている。差額地代を生じない最劣等地<sup>(3)</sup>でも生じる絶対地代が、すべての耕地に均等に生じる地代として位置づけられている。このようにマルクスは二つの区別すべき地代形態の名称をほぼ同時にいわばペアのようにして導入したが、しかし導入にあたって特に定義はしておらず<sup>(4)</sup>、草稿のこれから後の部分ではごく普通の用語に属するかのようこの両用語を頻繁に使用している。しかし、筆者

- 
- (2) 差額地代が「差額地代」と呼ばれるのは、その大きさが豊度と位置によって規定されるそれぞれの農耕地の生産力（生産費単位あたりの収量）の差に基づいているからであり、この名称の根拠を理解するのに困難はない。これに対して絶対地代がなぜ「絶対地代」と呼ばれるのかには説明が必要であるように思われるが、マルクスはこの呼び名を最初に用いるにあたってこのような説明らしきものを与えていない。しかし次の文章が手掛かりとなるであろう：「農業生産物の価値がその費用価格〔生産価格〕よりも高ければ、それは、土地の相違にはまったくかわりなしに、地代を支払うるのであり、また、最もやせた土地や最も貧しい鉱山でも最も豊かなものと同額の絶対地代を支払うるのである。」（ebenda,S.957）この文章から、絶対地代は、差額地代とは対照的に、農工両部門間の生産条件の相違に基づいて農業部門内部の生産条件の差異にはかわりなく（絶対的に）均等に生じるので絶対地代と名づけられる、ということが分かる。またエンゲルスに宛てた62年8月02日付けの手紙（前出）ではさらに簡潔に、「絶対地代というもの（すなわち、いろいろな土地種類の豊度の相違にはかわりのない地代）」（III/12, S.180. 強調は原文）と述べられている。この手紙ではマルクスはすでに差額地代・絶対地代という用語をあたかも既定のものであるかのように頻繁に使用している。なお、林1973は絶対地代の名称的根拠を「土地所有の土地に対する資本投下の「絶対」的制約作用」（同、69ページ）に求めているが、上に示した文言に照らして、このことはマルクス自身がこの名称を考え出した根拠とは異なると思われる。もちろん絶対地代が林のような土地所有の作用から生じることは、前の注(1)でも述べたように否定しえないところであるが。
- (3) 最劣等地には（差額）地代は発生しないということはリカードにおいては明確に想定されているが、マルクスはこの想定について61-63年草稿では明確な立場を取っていない。第三部「主要原稿」の第6章でも繰り返しこのテーマに立ち帰り、「b. 差額地代」の最後でも再論している（エンゲルス版では「第44章 最劣等耕作地でも生じる差額地代」）。次節参照。

の確認した限りでは、II/3.3の「g ロートベルトゥス氏」の最初からおよそ80ページ目にあたる上に引用したふたつの箇所 (ebenda,S.749,754) 以前には、これらの用語はまったく使用されていない。当然、リカードその他の経済学者の著作でもこれらの用語は使用されておらず（彼が地代について論じる場合、地代はいつも単に「地代」とだけ表記されている、彼にとって地代はマルクスの言う差額地代ひとつだけであったからこれでも不都合はなかったのであろう）、これらはまったくこの時点でのマルクスの創案にかかるものであった。もちろんこの後にマルクスが地代について論じたごく少数の草稿やメモにおいては、差額地代・絶対地代は既存の用語であるかのように何度も使用されている（特に『資本論』第三部の「主要原稿」で地代を論じた第6章では、周知のようにこれらの用語が二つのメインタイトルになっている）。

しかし、1862年8月02日付けの手紙でこれらの用語を知る機会があり、またマルクス没後には上記の諸草稿を実見していたエンゲルスは、その後1894年10月付けの『資本論』第三部への「序文」にいたるまで（現在までにMEWとMEGAに公表されている資料によって見るかぎり）これらの用語は使用していない（第三部の編集原稿を印刷に付す準備をしていた同年01月に彼がドイツ社会民主党の理論機関誌 *Neue Zeit* に発表した第三部の短い内容紹介（ないし出版予告）の論文でも、地代は単に「地代」と呼ばれている。Cf.I/32,SS.267-8）。またマルクスも62年8月にエンゲルスに宛てた手紙で彼が新たに編み出した二つの地代概念について報告した後、誰に宛てた手紙の中でもこれらの用語を使ったことはなかった。こうして、絶対地代・差額地代という用語は、『資本論』第三部がエンゲルスによって1894年に刊行され、さらに、61-63年草稿の一部が『剰余価値学説史』としてカウツキーによって2005-10年に刊行されるまでは、これらの編集にあたったエンゲルスとカウツキーを除いて、未刊の草稿の中に書かれていただけでおおやけには知られていなかったことになる。

差額地代・絶対地代という対概念は、こうしてマルクスによって19世紀中葉にひそか

---

(4) 明確な定義は、もっと後の個所のロートベルトゥスから離れた差額地代についての考究のなかで次のように与えられている：「絶対地代は、原生産物の平均価格を越える価値の超過分である。差額地代は、有利な土地で栽培された生産物の市場価格が、その土地自身の生産物の価値を越える超過分である。」(ebenda,S.795. 強調は原文)

に生み出されその後長い間彼の草稿ノートのなかに埋もれたままになっていた。そして、30年から40年の時を隔ててようやく広く知られることになったのである。この過程に加担した当事者の一人であるカウツキーは、Kautsky (1899)の第五章において資本主義的地代の両形態としての差額地代と絶対地代について別々に論じている。この時はすでに『資本論』第三部刊行から5年後であった。彼はマルクスとエンゲルスの忠実な弟子として第三部の刊行直後にこれを詳しく研究したと思われる。おそらくこの頃から初めて、彼自身もそれに大きく貢献したマルクス主義の普及とともに、また彼の手による『剰余価値学説史』の刊行もあって、ごく普通の経済学上の用語の一部として広く使われるようになったのであろう。それと同時に、差額地代・絶対地代というという用語はその生誕の経緯が忘れられ、さらには、リカードを含むマルクス以前の地代理論に対してもごく当然のこのように用いられるようになっていった。「リカードの差額地代論」という言い方に今では何の違和感もないであろう。本稿でもこのような用語法をそのまま踏襲する。以上やや執拗にマルクスの地代理論のキーワードの誕生の経緯とその後の経過について述べたが、それはやや忘却されてしまったように見えるこの誕生の経緯が、61-63年草稿（および65年の第三部「主要原稿」の地代に関する章）におけるマルクスの経済学研究においてかなり重大な意味をもつ出来事であったことを、ここで再確認しておきたいと考えたからである。

さて、以上見てきたように、マルクスはロートベルトゥスの著作を手掛かりとしながら新しい地代の概念を確定してこれを「絶対地代」と命名したのであるが、彼はそのすこし後で「これをもって地代論は本質的にかたづいている」(II/3.3,S.758)と言う。前後のコンテキストからしてここで彼の言う「地代論」がロートベルトゥスのそれを意味していることは明らかであり、マルクスにとって地代論そのものが全体として「かたづいた」わけではない。事実、彼はさらにすこし先でロートベルトゥスの1851年の著作についての批判的検討を終えて、次の項目「リカードの法則の発見の歴史に関する覚え書き」に入っていく。その後再び「[・・・・] ロートベルトゥスへの回顧」(ebenda,SS.801-13)に立ち帰っているが、ここではマルクスは彼の理論の「ポンメルンの地主」的性格について種々の側面からの指摘を行い、この性格のゆえに彼のリカード批判が的外れなものに終わり彼の地代理論が資本主義的地代の理論として不適格であることを示すにとどまる（これらの点についてはすでに本稿（1）（前号）の注23で簡単に触れた）。マルクス自身の地代理論がここ

で何らかの前進をしているわけではない。61-63年草稿におけるマルクスの絶対地代の概念は先に見たところでその輪郭がすでに明確になっており（指摘したようないくつかの問題はあるにしても）、これ以上に展開されてはいない。

マルクスはロートベルトゥスの著作の批判的検討から絶対地代の概念にたどり着いたが、これを起点として彼は同時にロートベルトゥスが批判するリカードの地代理論に対しても批判的に立ち向かうことになった。リカードの理論における絶対地代の（否認以前の）欠如に対する批判が、彼の価値論・価格論のレベルまでさかのぼって遂行されなければならなかった。マルクスはすでに早くから（たとえば『要綱』において）リカードの価値論に対しては批判的な立場を取っていたが、しかしこのような点からのリカードの地代論の批判は61-63年草稿以前にはありえなかった。これは、マルクスが「5 剰余価値に関する諸学説」に先立って執筆した「第三章 資本と利潤」において、はじめて生産価格（この段階ではしばしば「費用価格」と表現されている）の概念にたどり着いたことと密接に関連している。このように絶対地代をめぐるリカードの地代理論の批判は、当時のマルクスにとって、彼が1860年代初頭に新たに切り拓いた理論的地平と不可分なものとしてきわめて重要なものと思われたに違いない。であればこそ、彼はこの点からのリカード批判をこの草稿の「g ローとベルトゥス氏」と「h リカード」において執拗に繰り返すのである。だがこれは、当事者たるマルクスではなくわれわれから見れば、リカードに絶対地代の概念が欠落していることまたその根本的な原因が彼の一般的利潤率を前提とした価値の理論にあることがすでに自明となっており、いくらこの点を繰り返し衝いても地代の理論が前に進むものではない、という意味でもあろう。このような判断から、絶対地代をめぐるマルクスのリカード地代論批判については、それが彼の草稿のなかで大きなウェイトを占めるとはいえ、以上の確認にとどめておきたい。

#### f. アンダーソン、マルサス、リカード

しかしもちろん、マルクスのリカード地代論の批判は上の点にとどまるのではなく、彼が早くも1840年代にアンダーソンにはじめて接して以来抱き続けていた「リカードの差額地代論」に対する疑問と批判は残されたままであった。このような問題領域はもはやロートベルトゥスとは直接的には関係のないものであるが、マルクスは彼のリカード地

代論批判に引きずられるようにして、10年ぶりにリカードの地代論の固有の問題に本格的に取り組むことになった（絶対地代についての批判はむしろリカード外在的であった）。また、61-63年草稿の一部において差額地代の側面からリカードの地代理論に批判的に対峙したことによって、彼がそのすこし後に執筆することになる第三部「主要原稿」の地代に関する章がその形を整える前提ができあがった（もちろん当初からそれを目指していたわけではなかったが）。この課題への接近は主として「リカードの法則の発見の歴史に関する覚え書き」の項でなされる。そのタイトルが語っているのは、ここでは「リカードの法則」つまり彼の差額地代論の前史を研究しこれとリカードの理論がどのような関係にあるのかを明らかにする、ということである。

この前史において圧倒的な位置を占めるのがジェームズ・アンダーソン (James Anderson, 1739-1808) である。マルクスは彼を地代論の「源泉」(ebenda, S.689) と位置づけ、彼よりも後の世代に属するマルサス、リカード、ウェスト (West, Sir Edward, 1782-1828) の地代理論（期せずしてすべて 1815 年 2 月のあいだに相前後して彼らが刊行したパンフレットに含まれる）のアンダーソンの理論との関係を確定しようとする（ただしリカードについてはマルクスはどういうわけか他の論者たちの著作物とはやや異なった扱いをしている。下記の注(5)の後半を参照）。リカードの差額地代論が彼の創案によるものではないことは広く認められていることであるが、しかし、地代論におけるリカードとマルクスとの関係となると、マルクスは前者から差額地代論を受け継ぎこれに彼独自の絶対地代論を加えて自身の地代論を構築したとする理解が一般的ではないだろうか。もちろん、マルクスはリカードの差額地代論をそのまま受け入れたのではなくこれに若干の改変や拡張を施したという保留は付けられるが、しかし理論の骨格そのものはリカードによっているとされる。筆者も竹永 2010 ではマルクスの差額地代論についてこのような見方をしていたが (126-7 ページ)、現在では両者の地代論を同じ「差額地代論」の名前で呼んでよいのかどうか問わなければならないほどの違いが、彼らのふたつの理論の間にはあるように思われる。これに加えて、マルクス本人がリカードの理論が先行者に大きく依存していると考えている (Cf. ebenda, S.689) のである（ただし、後に見るようにこの関係は単純ではない）。

最初に、リカードの差額地代論に関連してマルクスが 1860 年代初頭の時点で全体としてどのような立場を取っているのかを確認しておこう（ここには 40 年代・50 年代以来の

彼の立場の延長と思われる点も含まれる)。マルクスはリカードの地代理論を全面的に否定し批判しようとしているわけではなく、次の二点に限っては積極的な評価を下しているように思われる。これら以外の点に関しては彼は概して批判的である。最初にマルクスが評価している点を簡単に確認してから、彼のリカード批判を彼以前から始まる理論史的コンテキストを勘案しつつより詳細に見て行くことにしたい。

第一はリカードの地代論が彼の価値論との関連において構想されていた<sup>(5)</sup>点である。「リカードのすぐれている点は（といってもウェストにも正しい関連がまったくないわけではないが）、彼における地代とその価値論との関連である」(ebenda) とマルクスは言う。ここで彼が考えていたのは、「穀物は地代が支払われるから高いのではなくて、穀物が高いから地代が支払われる」(Ricardo, I/74) のであって、土地所有と（差額）地代の存在にもかかわらず「高い穀物の価格」は地代によって規制されているのではなく、地代の有無にかかわらず「その生産に投下される労働量に左右される」(ibid.) という、リカードの主張であろう。このような主張は、彼の『原理』第一章の途中 (ibid., p.23) から始まったスミスの価値論に対する批判の延長上に位置づけられる。マルクスもリカードのスミス価値

---

(5) この点は羽鳥卓也がリカード研究の立場からすでに指摘している（羽鳥 1982 の第 5 章第 5 節「『原理』の章別編成と地代論」を参照）。生産に投下された労働の量が商品の価値を決定するという原理が「資本の蓄積と土地の占有の双方に先行する初期未開の社会状態」だけでなく、この両者が出現した「社会のより進んだ状態」にも妥当することを確認するために、リカードはこの二つの要因について個別に吟味を加えようとした。第二章「地代について」の冒頭第一パラグラフ (Ricardo, I/67) はこの章の課題が二番目の要因の吟味にあることを明示している。たしかに『原理』の地代論については価値論との関連の意義を強調することは妥当と思われるが、しかし、リカードがマルサスの直前に刊行された著作 (Malthus (1815)) に強く依拠しながら地代についての彼自身の立場をはじめて表明した『利潤論』(Ricardo, IV) には、まだ価値論は存在しておらずこのときには地代論は価値論とはかかわりなく展開されていた。

マルクスは 1851 年夏に作成したとされるロンドン・経済学ノート (IV/9 に収録) の一部で『利潤論』からわずかな抜粋を行っている (ebenda, SS.159-60) が、全体にわたって少しずつ飛び飛びに引用しており、特定のテーマを追跡しようとしたようには見えない。彼は、「リカードの法則の発見の歴史に関する覚え書き」の中で『利潤論』から次の箇所を引用している：「どれかひとつの階級に対する配慮が、国の富と人口との増進を妨げることを許されるということを、私はきわめて遺憾に思うことであろう。」(穀物が自由に輸入される場合には、)「土地は放棄される。」(II/3.3, S.776. 前者は Ricardo, IV/41、後者は ibid., p.39 より。( ) 内はマルクスの文章。強調はマルクス) これらの引用文は IV/9 の中の抜粋に含まれており、このノートから取られたと思われる。これらの特に注釈の付されていない引用が、マルクスが彼の生涯を通じて『利潤論』から行った唯一の引用であり、彼はリカードのこのパンフレットにほとんど注意を払わなかったように思われる。

論批判に同調し、ここに経済学説史における進歩の重要な一局面を見いだしている。マルクスの差額地代論の立場からしても、（歴史のある特定の時期における）農産物価格の高騰と地代の上昇とは前者から後者への因果関係によって説明されるべきであり、スミス（およびマルサス）のように（土地の根源的な生産力に基づく）農産物の高価（高価値）から地代を説明すべきではない（しかし、絶対地代についてはこのことは妥当しない）。

マルクスがリカードの地代論の中で積極的意義を認める第二の点は、地代が生まれる根本的原因が土地の高い生産力ではなく反対に土地の生産力の低下に求められていることである。「リカードが依然として正しいのは、彼が農業の「剰余価値」[マルクスがこの語をカッコに入れているのは、この語が「工業のそれを超える農業固有の剰余価値」という意味で使われているからであろう。メガ編集者の注解]を、豊度のより大きいことからではなく、豊度のより小さいことから導きだしていることである。」(II/3.3,S.749) 農業では人間と自然がともに働くのでより高い価値をもった農産物が生み出されるとするスミスの主張や、マルサスに存在する地代は天の恵みによる剰余だという思想によって、地代の発生と土地所有者によるその取得を社会的に正当化しようとする試みに対する反対論として、マルクスはこの点を高く評価する。また経済学史的に見れば、スミスにおいてはなお不徹底であった重農主義との断絶の完了も意味する<sup>(6)</sup>。

さて、リカードの（差額）地代論に対するマルクスの批判は前者の理論の歴史的位置づ

---

(6) リカードは『利潤論』の「序文」の冒頭で次のように言う：「地代を調整する諸原理は本論で簡単に述べられているが、それは、マルサス氏のすぐれた近著 [Malthus1815] において、私はそれに負うところはなはだ大であるが、きわめて十分にかつ非常にみごとに展開されたものとごくわずかな程度ながら異なっている。」(Ricardo, IV/9) 彼が本論の中で、「地代の意味を、私はつねに、土地の本源的で内在的な (original and inherent) 力の使用に対して地主に与えられる報酬 (ibid.p.18) と解する、と言う（同趣旨の言明は『原理』第二章の最初でも繰り返されている。Cf. Ricardo, I/67) のも、あるいはマルサスからのこのような影響によるのかも知れない。しかしリカードが実際に二つの著作において地代の発生と増大をどのように説明しているか（ここで彼はマルサスと「ごくわずかな程度ながら異なっている」のか）を見れば、リカードのこのような言明にもかかわらずマルクスの評価が正当であると思われる。マルクスもリカードのこの言明を（もちろん『原理』の方から）引用して、これを「まずい (schlecht)」と評している。その上で次のようにつけ加えている：「第一に、土地は「不減な諸力」などもってはいない。」「第二に、土地はまた、それがけっして「本源的なもの」ではなくて自然史的な過程の所産であるかぎりでも、なんら「本源的な」諸力というものもっていない。」(II/3.3,S.888) 土地の力（農業生産にとっては豊度）に対するこのような見方こそ、マルクスがアンダーソンに依拠しつつリカードの地代論を批判した主要論点のひとつであった。

けと不可分である。アンダーソンがこのための出発点となることは言うまでもない。マルクスは彼の著作を経済学研究の最初期に属する 1845 年にはじめて読んだ後も、その著作をいくつも渉獵している。そして、「5 剰余価値に関する諸学説」で地代について論じるにあたっては、アンダーソンの関連諸著作についてすでに十分に読み込んでいてそれらについての一定の見解を持っていたと思われる<sup>(7)</sup>。ところで、Sperl1995 の記述によれば、マルクスがアンダーソンの著作を 1845 年以後集中的に読んだのは 1858 年からの 2 年程度の間のことであったようである。マルクスはこのころ諸般の事情に妨げられて中断をともないつつも、「経済学批判」の体系的著作の仕上げを最優先の課題と考えていた。すでに見たように当面完成させるべきこの著作には地代の項目は含まれておらず、地代は土地所有とともに体系のはるか先に位置していた。マルクスの思考において地代が当面の研究課題とは遠く離れていたと思われるこの時期に、なぜ彼がアンダーソンの著作を博搜したのかやや理解しがたいところが残る。もちろん、彼が当面の主要な研究課題とはかけ離れているように見える多数の分野にも絶えず知的好奇心を持ち続けていたことを考えれば、年来彼の脳裡に残っていたと思われるリカードの地代論に対する疑問を解く鍵として、差し迫った仕事のあいまにアンダーソンの著作を読み漁ったということはあるであろう<sup>(8)</sup>。

さて、次に引用するのはマルクスがリカードの地代論の歴史的 position についてはじめて述べている個所である：「リカードは、なるほど地代論の発明者ではない。ウェストとマルサスのほうが、リカードよりも前に地代論の著書を出版している。しかし、源泉はアンダーソンである。」(II/3.3,S.689. 強調は原文) すなわち、アンダーソンを源泉とする(差額)地代論はウェストとマルサスを経てリカードに受け継がれた(もちろんそのままではなく種々の変形をともないつつ)。マルクスがここで念頭に置いているのは、1815 年 2 月のあいだにマルサス、ウェスト、リカードがイギリス議会での穀物法の審議開始に合わせるかのようにして地代論を含むパンフレットを立て続けに刊行したこと、またその際リカードの仕事が最後に刊行されたこと、であろう。スラッフア(Ricardo, IV/5)によれば、2 月 3 日にマルサスの『地代の研究』(Malthus1815)が現れ、ウェストのパンフレット(West1815)

---

(7) マルクスとアンダーソンとのかかわりについての以下の記述は農業経済学者の加用信文の業績(加用 1965、1970、1972)に多く負っている。

が同13日に続き、リカードの『利潤論』は月末の24日になって刊行されたがこの時にはすでに議会での審議は始まっていた。マルクスはスラッフアのように当時の状況についての綿密な調査をしたわけではないであろうが、おそらく三者の著作の内容的な対比から上のような正しい順序を推定していたのであろう。

刊行順序よりもさらに重要なのは、相互の影響関係の問題である（この双方について Pasinetti (2014) はスラッフアに拠りながらさらに突っ込んで考究を加えている）。リカードはマルサスの著作が刊行されるとその3日後にはすでにこれを読了していたことをマルサスに手紙で報告している。リカードはこれを機会におそらくはじめて地代について考

---

(8) マルクスが引用しているアンダーソンの著作全5点をここに年代順に一括して挙げておく。これらからの引用はほとんどすべて「リカードの法則の発見の歴史に関する覚え書き」(II/3,3,S.765-801)の中でなされている。タイトルに使用されている英語には邦訳にとまどうものもあるが、加用によるものなどを元に参考までに邦訳タイトルを付しておく。マルクスが1845年に直接に読んで抜粋を取ったのは4番目の *A calm investigation...* であり、またこのとき同時にマカロックの文献目録・抜粋集 (McCulloch (1845)) によって一部抜粋を読んだのは1番目の *An enquiry...* であった。また加用によれば、3番目の *Essay...* はマルクスが独自に発掘した（つまりこの著作の中に地代論が含まれていることを彼が発見した）ものであり、「特記すべき」こととされている（加用1970、7ページ）。事実、McCulloch (1845) の当該箇所にも、ルヨ・ブレンターノが彼の解説を付して『剰余価値学説史』が現れる前の1893年に編訳刊行したアンダーソンの著作集 (*Drei Schriften über Korngesetze und Grundrente*) でも、本書の存在は記されていない。マルクスがなみなみならぬ熱意をもってアンダーソンの地代論の研究に取り組んだことがうかがえる。

1. *An enquiry into the nature of corn laws; with a view to the new Corn-Bill proposed for Scotland*, Edinburgh 1777（『穀物法の本質に関する研究』）
2. *An inquiry into the causes that have hitherto retarded the advancement of agriculture in Europe*, Edinburgh 1779（『従来ヨーロッパの農業の進歩を遅らせていた諸原因の研究』）
3. *Essay. Relating to agriculture and rural affairs*, vol.3, Edinburgh 1796（『農村および農村事情に関する論考』、第三巻）
4. *A calm investigation of the Circumstances that have led to the present scarcity of grain in Britain*, London 1801（『イギリスにおける現下の食料不足をもたらした諸事情に関する洞察』）
5. *Recreations, in Agriculture, natural-history, arts and miscellaneous literature*, vols. 1-4. London 1799-1802（『レクリエーション』第1号-第4号、1799年-1802年）

これらの書籍・雑誌はすべて現在まで邦訳されたことがないし現在ではきわめて入手困難な稀覯本に属する。いずれの書物（ないし雑誌論文）の表題にも「地代」という言葉が使われていないことから推測されるように、アンダーソンはこれらの著作のいずれにおいても地代を主題的に論じておらず、彼の地代についての見解は他の話題の合間に分散的に示されているにすぎないようである。以上のような事情から遺憾ながら本稿の準備にあたって筆者はこれらの著作を直接読むことができなかった。またアンダーソンの地代理論についての本格的な研究は加用の上記のものを除いて見つけることができなかった。したがってアンダーソンの読み方についてはマルクスのそれを相対化することができず、マルクスに全面的に依拠せざるをえなかった。

えたのではないかと思われる。1811年に地金報告が否決され地金論争が下火になるとリカード（そしてマルサス）の関心は通貨問題から穀物貿易や利潤の問題に移行していった。この経緯は彼らのこの時期の往復書簡の内容から明らかである。この間リカードの思考の中で地代の問題がどのような位置を占めていたかについてスラッファは次のように述べている：「マルサスの『地代の研究』の発刊された時期までのリカードの手紙には、地代を主題とする議論はなにも含まれていない。リカードが多年にわたって精通してきたものは、土地の収穫逓減法則であった。しかし1813年と1814年の彼の手紙では、彼はこの法則をただ自分の利潤理論に適用しただけである。」(Ricardo, IV/7)「リカードは、利潤という主題を扱うにあたって、地代の原理を考慮することが必要であるという叙述でその「序文」を始めているのであるが、実際はそれに先立つ二年間、彼のどの手紙でもまだ、地代についてははっきりと言及する必要に気づかずにそのなかで彼の利潤理論を築きあげていったのである。」(ibid.) そうだとすれば、リカードは1815年2月上旬にマルサスのパンフレットを読んでから月末に『利潤論』を刊行するまでのごく短期間のうちに、彼の地代理論を「マルサス氏のすぐれた近著」に「はなはだ大きく負い」ながら仕上げたということになるであろう。事実リカードは『利潤論』での彼の地代論がマルサスの地代論の絶大な影響の下にあったことを次のように認めている：「地代の起源と増進とにかんして今まで述べてきたすべてにおいて、私はマルサス氏が同じ問題について、彼の“*Inquiry into the Nature and Progress of Rent*” [Malhus1815]においてきわめてみごとに設定した諸原理を簡単に繰りかえし、説明しようと努力した。」(Ricardo, IV/15 note)

しかも彼がこのパンフレットの前半で展開している差額地代論の骨格は、価値論との関連付けの有無を除けばその2年後に刊行された『原理』の初版の第二章「地代について」の地代論と同じである。また、その後2年おきに改訂された『原理』第二版・第三版の第一章「価値について」とは対照的に、あたかも彼の地代論をめぐってはなにも論争がなかったかのように<sup>(9)</sup>、リカードは第二章には実質的にはまったく改訂を加えていない。つまり、リカードの地代論は彼の理論的生涯の最後にいたるまで、1815年2月に最初にそれが（おそらく事前の準備もなく急いで）書かれたときの原型を保持していた、ということになるのではないか。「リカードの差額地代論」と言えば経済学史の上でも重要な貢献とみなされ多くの研究と論争が積み重ねられているが、その原型（および最終型）は

以上のようにして形づくられたと思われる。

そこで問題になるのはアンダーソンからマルサスそしてリカードへの継承（影響）関係をどう見るかである（ここではウェストの関与については措く）。上に見たような経過でリカードが彼の地代論を作ったとすれば、彼はアンダーソンの存在およびその著作に点-in-していた地代論についてまったく知らなかったであろうと考えられる（実際、スラッフア編の『全集』第 XI 巻の索引には Edward West は出てくるが James Anderson の名前は出てこない）。だとすれば、アンダーソンがリカードの地代論に何らかの関係があるとしても、それはマルサスを介してのことであると考えざるを得ない。そこで問題は、アンダーソンとマルサスのあいだの関係に絞られてくる。マルクスは両者の関係について次のように言っている：「リカードは明らかに「アンダーソン」を知らなかった。というのは、彼はその経済学の序言においてウェストとマルサスを発見者とみなしている [Ricardo, I/5] からである。[...] マルサス氏の場合はちがう。彼の著書を正確に比較検討してみれば、彼がアンダーソンを知っていて利用していることがわかる。彼はそもそも本職の剽窃者だったのである。」(II/3.3.S.766. 強調は原文) しかし、約 100 年後の 20 世紀に入ってからシュンペーターが指摘した (Schumpeter (1954), p.481) ように、マルサスがアンダーソンを「剽窃」したという彼の断定についてマルクスは何も証拠を示していない。マルクスの「剽窃」説の妥当性の問題に正面から取り組んだ Prendergast (1987) で著者は、「1803 年から 1815 年までの奨励金と地代についてのマルサスの思考の展開を追って見れば、マルサスが実際にアンダーソンを知っていて [彼の理論を] 使ったということを示すことは可能である」(ibid., p.389) と述べて、彼女自身でアンダーソンとマルサスの関連著

---

(9) 実際には、リカードはマルサスと地代をめぐる書簡での論争を続けたが価値論の場合とは異なってこの論争は『原理』の第二章の改訂となって現れることはなかった。またそれだけではなく、『原理』初版が現れるとすぐに、本稿末の「参考文献目録」に [Anon.] として掲げた二本の匿名書評論文（いずれも *The Farmer's Magazine*... に 1819 年、1820 年に掲載）や Craig (1821) においてリカードの地代論に批判的な論評がなされている（リカードが地代支払いをとまわらない土地の賃貸借を想定していることや、等量の資本と労働が順次投下されていくというような農業における実際の資本投資の拡大とかけ離れた仮定に基づいて地代の累進的增加を説明していること、などに対する批判）。おそらくこのような論評はここに示した少数の例にとどまらなかったであろう（特に、農業経営の実態に近いところにいた論者たちからは）。しかし彼はどのようなわけかこれらの批評に対してまったく反応を示さず無視しとおした。

作を詳細に対比した上で<sup>(10)</sup>次のように結論付けている：「マルサスを剽窃の廉で避難したときマルクスは彼の主張をおそらく強く言いすぎたにしても、アンダーソンの地代理論の説明がマルサ스에 極度に重要な知的影響を与えたことを信じるに足る鞏固な根拠が存在するように思われる。」(ibid., p.407) また Prendergast (1987) を紹介した菊池はこの結論から、「マルクスが具体的な根拠も示さずにマルサス剽窃説を展開したのは、まさしく両者を読み比べた時に出てくる確信によるものなのだ」(菊池(2003)、191 ページ。強調は原文)、という判断を下している。

だが仮にマルサスの地代論がアンダーソンの理論の強い影響の下に形成されたとしても、それは後者の理論が元のままの形で生かされたということを必ずしも意味しないであろう。この点に関してマルクスの判定は非常に手厳しい。「マルサスは、のちの彼とリカードとの地代論争が示すように、自分が採用したアンダーソンの理論そのものを理解していなかった。」(II/3.3.S.689) つまりマルサスは剽窃はしても理解はしていなかったと言うのである。マルクスはマルサスの地代論に対してはこのような見方をしていたためか、スミスやリカードの地代論についてのような詳細な批判的検討をマルサスに関してはまったく行っていない。マルクスにとってマルサスは敵対すべき「人口の原理」の著者としてのみ存在したようである。もしリカードがこのようなマルサスに「はなはだ大きく負い」ながら彼の(差額)地代論を(しかも大急ぎで)作ったとすれば、「源泉」であるアンダーソンから大きく乖離していてもおかしくないであろう。実際、マルクスの提示するアンダーソンの理論のうちリカードの理論と共通しているのは、土地の豊度に差異が存在することに地代発生<sup>(11)</sup>の根拠があり地代の大きさはこの差異によって定まる、という一

---

(10) 加用は先に注(8)で紹介したアンダーソンの著作 3. のなかに、「農業改良によって、社会の享ける利益は算術級数的(arithmetical ratio)に増大するのに対し、地主の収入は、ほぼ幾何級数的(geometrical proportion)に増大する」(ibid., p.107) という章句を見いだして、「これは、明らかにマルサスの『人口論』をして一躍有名ならしめた人口と食料に関するレトリックの先蹤とみられるが、ただマルサスがこのアンダーソンの章句を知っていたかどうかは審らかでない」(加用(1970)、27 ページ)、と述べている。ちなみに、マルクスはアンダーソンの地代理論とマルサスの人口論の関係について、前者は「マルサス人口論の決定的な敵対者であることをのちに宣言したのであって、彼自身の地代論がこの奇怪なものに基礎として役立つなどとは予想もしなかったのである」(II/3.3.S.767)、と述べている。マルサスの強い影響のもとに形成されたりカードの地代論でも、前者の人口論と同じように、人口の増加にともなう耕作の拡大とともに次第に穀物(食料)生産の困難が増大してゆく、そしてこの傾向は不可避である、と見なされる。

点のみであろう。もちろんこれがある地代理論が差額地代論とよばれる所以なのであるから、この一点の共有のみをもってしてもアンダーソンからリカードへという継承関係を言うことは可能であろう。だがこの差異がどのようにして生じ、維持され（あるいは消滅し）、拡大（ないし縮小）するのかに関しては、リカードはことごとくアンダーソンとは異なる立場を取っている。具体的には、土地豊度の固定性・不変性、収穫逡減の法則、優良地から劣等地への一方向の農耕の拡大、これらをリカードが当然の前提として彼の地代論に採用していることである。これらを取り払えばリカードの地代論は維持しえなくなるであろう。マルクスはリカードにおいて忘れられていたアンダーソンという「源泉」を、彼自身の読みを通じて再度復活させようとする。これが、ロートベルトゥス批判からはじまった61-63年草稿におけるマルクスの（絶対地代とならぶ）差額地代についての考究の中心課題である。

マルクスは「リカードの法則の発見の歴史に関する覚え書き」の項の冒頭で、アンダーソンの地代を論じた主要著作とその特徴そして歴史的意義についてまとまった記述を与えている（ただし「リカードの法則の発見の歴史に関する覚え書き」のなかではここで挙げられている3点以外の著作も言及・引用されている。先の注(8)のリストを参照）。「アンダーソンは実地の借地農業者であった。地代の性質を付随的に論じている彼の最初の著書は、1777年に出版された[注(8)に挙げた文献1.]。[・・・]ある直接の実際的論争問題を契機にして書かれたこのスコットランドの借地農業者の著書は、「専門的に」地代を論じたものではなく、ただついでに地代の性質を解明したにすぎず、少しも注意を呼び起こすことができなかつたのである。アンダーソンは、この著書のなかで地代をたまたま論じているにすぎず、専門的に論じているわけではない。同じように付随的に、彼のこの理論は、再び彼自身が出版した自分の論文集、『農村および農村事情に関する論考。1775-1796年、全三巻。』エディンバラ、という表題で出版された三巻本[同3.]のなかの、一、二の論文にもまぎれ込んでいる。1797年に出版された『農業、博物学、芸術および各種の文献におけるレクリエーション、ロンドン、1797年。』（大英博物館で調べて見る）[同5.ただし未確認であったためか刊行年次が誤っているようである]も同じであって、これらの著書は、直接に借地農業者と農業家を目あてにかかれたものにほかならない。もしアンダーソンが彼の発見したものの重要性に気づいていて、それを別に地

代の性質に関する研究として世に問うていたとすれば、あるいは、もし彼が、彼の同時代人マカロックが他人の考えをもってあれほど効果的にやったように、自分自身の考えをもって取引する才能をほんのわずかでももっていたとすれば、〔事情は〕違って〔いたであろう〕。1815年に現れた彼の理論の再生産は、すでにウェストやマルサスのそれぞれの著書の表題が示すように、直ちに、地代の性質に関する独立の理論的研究として出版されたのである〔同年同月に出版されたリカードの『利潤論』はどのようなわけか無視されている〕。』(II/3.3.S.765. 強調は原文)

先に見たように、1815年に現れた地代に関する独立した複数の理論的研究はこれらに先行するアンダーソンの著作なしにはあり得なかったであろうが、しかしこの時にはすでに、これらの著作は引用も言及もされることなく、表面上その存在は無に帰していたのである。マカロックが McCulloch (1845) でアンダーソンの著作を取り上げた時もその著作リストには欠落があったし、彼の行った抜粋にはアンダーソンがリカードの地代論の先行者であったかのような印象をこの時代の人々に与える(おそらくリカードの「忠実な弟子」としての意図的な)取捨が加えられていた(本稿(1)(前号)の注(3)を参照)。マルクスの上の文言はこのような状況の中で書かれたものである。

### g. アンダーソンとマルクスの差額地代論

さて、マルクスは土地の豊度をアンダーソンがどのように見ていたかについて次のように述べている：「彼は、いろいろな土地種類におけるこの相対的な豊度、したがってまた優等な土地種類に比較して劣等な土地種類の豊度が相対的に低いことが、農業の絶対的な豊度と絶対になんの関係もないことを、はっきりと述べていた。反対に、彼は、すべての土地種類の絶対的豊度は、絶えず増大されうるし、また人口の増進とともに増大されるにちがないということを強調しただけでなく、さらに進んで、いろいろな土地種類の豊度の不均等は累積的に均等化されうるということをも主張していたのである。」(II/3.3.S.766. 強調は原文) リカードの地代論では地代の発生と増大は彼の想定する次のような過程によって説明される。より有利な条件で必要に応じて穀物<sup>III</sup>(これが食料を代表する)を生産するために最も豊度の高い土地から耕作が始められ(このためにはすべての可耕地の豊度があらかじめ知られているという実際にはあり得ない仮定を設けることが必要である

う)、「社会の進歩」にともなう穀物需要の増大とともに広さに限りのある最優良地が耕作されつくすと、やむを得ずその次に有利な土地での耕作が始まる。土地の豊度は自然によって与えられたものであるから、二種類の土地の絶対的豊度も両者のあいだの豊度差も一定不変である。そして地代はこの豊度差から生じその大きさは豊度差の大きさによって決定される。食糧需要の増大がすすめばさらにもう一段階豊度の低い土地が耕作に引き入れられることになり、最優良地とこの三番目に耕作される土地との豊度差はそれ以前よりも拡大し、さらに二番目に耕作される土地にも新たに三番目の土地との豊度差に基づく地代が発生する。リカードは同様の過程が資本の蓄積にともなって徐々に繰り返されていくと考える。それぞれの土地の豊度が自然によって与えられていて変化しなければ、この過程を通じて地代と穀物価格とは同時並行的に進むはずであり、社会の進歩・停滞・衰退に応じてともに上昇・一定・下落するはずである（リカードが一般的に想定するのは「進歩する社会」である）。したがって地代と穀物価格との反対方向への運動や一方のみの運動はありえないとされる。

だが、アンダーソンの観点からは、「一方の国では穀物価格が高くて地代が低く、他方の国では穀物価格が低くて地代が高いということがありうる。」(II/3.3,S.766-7)このような状況は、マルクスが1851年01月07日付けのエンゲルス宛の手紙で、リカードの地代論の諸命題とは「歴史はどこでも矛盾している」(III/4, S.6)と述べた時に提起した疑問に通じるものであろう。土地の豊度と豊度差が可変的であることが認められれば、地代と穀物価格の相反的な運動は少しも不思議なことではなくなる。土地豊度が可変的であるとすれば、さまざまな土地の豊度の順位もそれらのあいだの差異も変化しうる。穀物価格の運

---

(11) リカードの地代論（またマルクスが第三部「主要原稿」第6章で展開する地代論）は、実際には多くの種類を含む農業生産物一般ではなく、主要農産物である小麦生産のみを例にとって構成されている。それは、「小麦が栽培されようとジャガイモが栽培されようと、いずれの場合にも、地代は同一の原理によって支配されるであろう」(Ricardo, I/333)からである。マルクスも、「ここではただ本来の農業地代、すなわち主要植物性生活手段を供給する土地の地代だけを眼中におかなければならない」(II/3.3,S.884. 強調は原文)と主張し、その理由もリカードと同様に、「他の諸部門における地代は、それらの部門自体に投下されている資本の構成によって規定されているのではなく、主要生活手段の生産に使用される資本の構成によって規定されている」(ebenda,S.932)ことにあるとする。だが、マルクスが「特に意図して土地所有を論ずることになったときに」与える予定にしていた「地代の詳細な説明」では、このような単純化は解除され「事柄を複雑にするような事情」も考慮に入れられるであろうとして、小麦だけを例に取るのはあくまでも暫定的な措置であるとする。

動は土地豊度の動きに反比例し、地代の総量はさまざまな土地の絶対的豊度とはかかわりなくそれらのあいだの豊度差に比例して動くであろう。しかし穀物価格と地代の総量は連動するのではなく、これらは相互に独立である。全体として土地豊度が上昇して穀価が低下しても土地によってその上昇の程度に大きな開きがあれば差額地代の総量は上昇し、反対に土地豊度が低下して穀価が上昇してももしそのことによって全体として豊度差が縮小すれば地代は下落するであろう。いずれのケースも抽象理論的には考え得るが、現実には種々の具体的歴史的要因の組合せによりさまざまな可能性の中から特定のパターンが現れるであろう<sup>(12)</sup>。ただはっきりしているのは、穀価の上昇が必ず地代の上昇をとまなうというリカードの想定するケースは決して普遍的なものではない、ということである。「アンダーソンが彼の観察した特殊な対象の範囲内で検討したものは、リカードのそれよりも無条件に広範であった。リカードは、ヒュームの理論の再生産である彼の貨幣論において1797-1809年の出来事〔銀行制限期〕だけを特に念頭においていたのであるが、それと同じように、アンダーソンの理論の再生産においては、1800-1815年の穀物価格の高騰という経済現象以外にはなにも念頭におかなかったのである。」(II/3.3,S.776. 強調は原文)

マルクスは、リカードの地代論の歴史的背景となっていたのがこのようにきわめて狭い、それ自体が特殊のないわば彼にとっての「現下のイギリスの状況」にすぎなかったことを、他の個所でも強調している(Cf. ebenda,S.880)。アンダーソンが行ったように観察の範囲を18世紀全体に広げてみると異なった状況が見えてくる(もちろんこれでもまだ「特殊な対象の範囲内」のことに変わりはないが)。「アンダーソンは、イギリスの穀物

---

(12) アンダーソンが著述活動に従事していたのは18世紀の最後の四半期から世紀転換期にかけてであったが、この時代からリカードの時代までのあいだには、イギリスが穀物輸出国から輸入国に変わるなど大きな変化があった。加用はアンダーソンの地代理論の形成の歴史的背景とその後の変化を次のように描いている：「この過程〔18世紀の第二次エンクロージャー〕において、土地の共同体的な耕地規制を打破して、新しい技術水準に即応した自然的豊度の発現を反映する地代の形成と、同時に囲込地での土地改良投資の進展に伴ういわゆる〈人工的豊度〉の増進に基づく地代化現象こそが、リカードの先駆者として差額地代論の創始者といわれるジェームズ・アンダーソンの地代論を生む農法的な背景であった。かかる地代的認識は、自から暗渠排水法の考案者と自認し、その他数々の啓蒙的な農業改良の推進者であったアンダーソンのみでなく、当時の進歩的農業者の体験的認識でもあったのである。その約半世紀のあと、ようやくリカード、マルサス等の経済学的思考の中では、もっぱら土壤の不可変性と土地の収穫遞減法則とに結びつけられた抽象的な論理としての差額地代論に定式化されていったのである。」(加用1972、27ページ)

価格が1700-1750年に比べて1750-1801年には上昇したことを、けっして耕作が累進的に豊度のより低い土地種類へ進んだことによるものではなく、この両期間中に立法〔農産物輸出奨励金。これをめぐってアンダーソンは『国富論』刊行の翌年にスミスを批判した。先の注(8)の著作リストの1.〕が農業に及ぼした影響によるものだと説明したのである。] (ebenda, S.767) 18世紀の前半と後半におけるイギリスの穀物価格の対照的な動きはマルクスが1845年に取ったアンダーソンの*A calm...* (同上著作リスト4.)からの抜粋(IV/4, SS.62-5)に含まれる話題でもあった。マルクスは61-63年草稿の執筆中にあらためてこの抜粋ノートを見返した可能性がある（このケースに限らず、この草稿のなかにはアンダーソンの著作からこのノートに含まれるのと同じ個所がいくつか引用されている。Cf. II/3.3, S.796-7）。マルクスが「リカードの法則の発見の歴史に関する覚え書き」で行ったアンダーソンの著作に依拠したりリカードの差額地代論の批判的検討は、40年代から50年代にかけてのはるかな昔から彼が抱いていた疑問に（ロートベルトゥスの地代論を「かたづける」とともに）ここで最終的に決着を付けようとしてなされたのかもしれない。

リカードの差額地代論は、上に見たように、土地豊度（実際の農業生産（農耕）ではこれに基づいて投下された資本により適用される農耕技術が加わって土地の生産力となる）の不変性を前提にして組み立てられているとはいえ、リカード本人はすでに1815年2月の時点から、土地所有者自身によるか借地農業者によるかを問わず土地改良のための投資がなされることによって、土地の豊度がいわば人工的に増大しうることを認識していた。しかもこの人工的な豊度の増大は当該投資の性質しだいでは長期におよぶこともある。マルクスは具体的に典拠を示していないがこの点について次のように述べている：「リカードは、アンダーソンがすでに知っていたことを知っており、また、その上彼は、資本によって生み出された土地の生産力がのちには土地の「自然的」生産力といっしょになり、したがって地代を膨張させるということも、はっきりと述べている。」(II/3.3, S.809) マルクスはおそらく注意を払っていなかったかも知れないが、リカードは『利潤論』の最初の方で次のように述べていた：「地代の意味を、私はつねに、土地の本源的で固有な力の使用にたいして地主にあたえられる報償と解している。地主が彼自身の土地に資本を費やしたり、以前の借地農 (tenant) の資本が借地期限の満了時にその土地に残存したりしていると、地主はなるほどより多くのいわゆる地代を獲得するかもしれない。しかし、この部分は明ら

かに資本の使用に対して支払われるものである。その他の部分だけが土地の本源的な力の使用にたいして支払われるものである。」(Ricardo, IV/18 note)『利潤論』では本論における地代の説明に対する補注という形で表明されたこのような問題意識は、『原理』では第二章の本文の冒頭で次のように繰り返されている。

「地代は、大地の生産物のうち、土壌の本源的で不滅な (original and indestructible) 力に対して地主に支払われる部分である。しかしながら、それはしばしば資本の利潤や利子と混同されている、そして通俗語では、この用語は、農業者 (farmer) によって彼の地主に年々支払われるものには、なんにでも適用されている。」(Ricardo, I/67) こうしてリカードは、土地が自然にもともと持っていた（農産物を生み出す）力（の差）からのみ地代を説明しようとし、土地改良のための投資によって人工的に土地に与えられた力に由来する収益を地代から範疇的に区別しこれを利潤または利子に分類すべきだとして、彼の地代理論の基本前提を防護しようとする。もしこの区別ができなければ、リカードの地代論はそのよって立つ基盤を失うことになるであろう。しかし、第2章「地代について」からはるか後の地代という主題との関連がはっきりしない第18章「救貧税」の末尾に付した長い注のなかで、彼はこのような範疇的な区別が結局は不可能であることを（あまり目立たない形でおそらくしぶしぶ）認めて次のように言う：「ひとたび改良がなされるならば、取得される収益は、その後はつねに、完全に地代の性質を持つようになり、そして地代のすべての変動を免れないであろう。」(Ricardo, I/262) マルクスが上に引用した文章を書いたとき、彼はおそらくこの注でのリカードの発言を念頭に置いていたと思われる。以前にはまったく農耕の行われていなかった土地を除くと、どのような農地も農業経営の繰り返しのなかにあるのだから、そのある時点での豊度のある部分は必ず以前になされた土地改良のための投資<sup>13</sup>の結果に多かれ少なかれ負っているはずである。そして、この土地改良の結果としての地力の部分と土地の「本源的で不滅な力」とを区別することができないのであれば、リカードが上の引用文で最初に述べている地代の定義は無効となる。しかしもちろん、リカードはこの点をきわめて隠微な形で認めただけに終わり、土地豊度が一定不変であるという想定にもとづいた彼の地代論の構造には何も変化はなかった。

ところでこのようなリカードの地代論の根幹にかかわる問題は、実はマルクスによってもすでに1840年代末に察知されていた。それは彼のプルドン批判の書『哲学の貧困』

(Marx (1847)) の第二章第四節「土地所有または地代」においてであった。この節はマルクスが生涯を通じて（リカードの）地代（論）について自己の見解をおおやけにした唯一の文書であった。おそらくそのために彼は後年になっても何度もこの著作に立ち帰って、自己の過去の見解の有（無）効性について再確認する必要を感じていたのであろう。「h リカード」に入る直前の個所(II/3.3,S.809)で、彼は「私はすでに近代的土地所有を完全に正しく説明しておいた」と前置きして上記の節から4個所を肯定的に引用し、そのうちのひとつについて「私はおなじように正しく、「土地資本 (terres capitaux)」が他のすべての資本と同様に増加しうることを指摘しておいた」と言う。この個所で彼は今われわれが検討している問題について次のように述べていた:「土地資本は、他のすべての生産用具とまったく同様に、増加しうる。プルドン氏の言葉で言えば、その物質的素材 (la matière) にはなにもものもつけ加えないが、しかし、生産用具として役立つ土地を増加させることはで

- 
- (13) 土地を基本的な生産手段とする農業への資本投資は工業には見られない複雑な構造を持つ。「土地改良のための資本投下は——これをかりに土地改良資本と名づける——は、それらが技術的には土地改良機能を伴うとしても、開墾資本および経常的営業資本とは区別されるのである。通常は灌漑・排水・客土・農地保全等の特殊の農業土木事業を伴うものが土地改良と呼ばれる。しかし、土地改良は、開墾・経常的耕作のごとく、個々の耕地の自然的豊度に直接的・個別的に働きかけるに止まらず、個々の土地の豊度を規制するより大なる自然環境への人工的加工を通じて行われる場合が多い。」(加用 1965、29-30 ページ。強調は原文) 農業ではこのように異なる目的をもった複数の投資が行われるが、リカードの地代論で役割を演じているのは事実上最初の経常的営業のための投資だけである。土地改良のための投資は、本文で論じたように、その結果が彼の地代概念に対して起こす困難な問題を指摘するために付随的に言及されているにすぎない。開墾のための投資にいたっては、リカードの地代論のなかに占める位置をまったく持たないと言ってよい。彼の地代論はあたかもすでに開墾されて可耕地となった豊度の異なる複数種類の土地（しかもそれぞれの土地の豊度はあらかじめ知られている）の存在を前提としているかのようである。しかも、一定の点を超えて耕作が拡大するまでは、それまでの耕作に必要ななかった豊度の劣る土地は未耕のままに放置されているかのごとくである。しかし実際には、耕作の拡大は未耕地の開墾をとめないながら進んで行くのではないだろうか。そうだとすれば、開墾の難易（技術の変化とともに変化しうる）によって耕地に変換される土地の順序が影響を受け、リカードが想定するように耕作の拡大が必ず豊度の高い土地から低い土地へとひとつの方向だけですすんで行くとは言えなくなるであろう。「優等地から劣等地への進行——これはアンダーソンの場合にそうであるようにそのつどの労働生産力の発展度にとって相対的であって、リカードの場合にそうであるように絶対的ではない。」(II/3.3,S.882)「現実には上昇線と下降線とが相互に交代し、交錯し、錯綜する。」(ebenda,S.1081) マルクスがこのように述べて耕作の拡大と土地豊度の高低とのあいだに必然的な関係はないとするのは、拡大の前提となる開墾のための投資が土地の種類によって変動しうるからである。また、実際の耕作の拡大は、土地の豊度とならんでその位置（市場からの距離）によっても左右されるが、距離のもつ経済的意味は交通手段の発達によって変化する (Cf. ebenda,S.943)。

きる。すでに生産手段に転化されている土地に第二次投資をするだけで、物質的素材としての土地 (la terre matière) すなわち、土地の面積に対して何ものをもつけ加えることなしに、土地資本 [資本としての土地] (la terre capital) を増加させることはできる。」(Marx (1847), Pléiade, p.127, MEW, Bd.4,S.173. 強調は 1847 年の原文ではなくマルクスが引用にあたって付加したもの) 彼はここでは地代については何も語っていないが、土地への資本投下によってその資本が生産手段としての土地の一部となり「土地資本を増加させる」という言い方によって、事実上この資本が土地の生産力に合体されると言っている。これはまさにリカードが事実上において認めていた土地豊度の人工的増加 (その自然的不変性の否定) を表現するものである。

マルクスは 65 年末に執筆することになる第三部「主要原稿」第 6 章の「a. 緒論」においても、「このように土地と合体された資本を、私は別のところで la terre-capital と呼んだことがある」と言って、『哲学の貧困』から上の引用文を含む同じページの一節をふたたび引用している (II/4.2,S.671)。そしてこの用語を自分で Erde-Kapital とドイツ語に訳してこの概念について詳細な説明を与えている (Cf. ebenda, S.671-2)。マルクスは『哲学の貧困』ではこの la terre capital という概念をもって「プルードン氏の物質的素材としての土地 (la terre matérielle de M. Proudhon) 」(Pléiade, p.127, MEW, Bd.4,S.173) を批判するが、これに先立ってプルードンの本から一節 (P.-J. Proudhon, *Système des contradictions économiques, ou philosophie de la misère*, Paris, 1846, tome II, p.265) を引用している (ibid., p.125-6, ebenda, S.172)。ここに含まれる文言からマルクスは la terre matérielle というプルードンの地代理論にとっての鍵となる概念を取り出し、それに対置すべく la terre capital という自己の批判的概念を作り出したと思われる。ドイツ語となった「土地資本」はエンゲルス編の『資本論』第三部に再現 (第 37 章「緒論」。Cf. II/15, S.686) して、マルクスの地代論を構成する鍵概念のひとつとなったが、この概念は以上のような経緯によって生まれた。

ところで、これまで見てきたように、マルクスは 61-63 年草稿においては、耕作がより豊度の低い土地へと拡大していくこと (外延的拡大) によって発生する差額地代についてはリカードの地代論に多方面からの批判的検討を加えているが、耕作の拡大が既耕地への資本の追加的投資として行われること (内包的拡大) によって生じる収穫逡減に基礎を置

く地代についてはほとんど論じていない。マルクスは次のようなあいまいな言い方で後者の問題に多少触れているだけである。「のちに地代のところで詳論すべきひとつの問題は、より集約的な耕作(intensiveren Kultur)の場合、前貸し資本との関係における地代の率は下がるにもかかわらず、地代の価値および量が増加しうるのは、どのようにしてであるか?ということである。このことが可能なのは、明らかに、ただ、前貸し資本の量が増加するからでしかない。」(II/3.3,S.757. 強調は原文)あるいは、「いったい彼[借地農業者]は余分な資本でなにをするべきか? 新たな土地の借り足しか? 農業生産は、より大きな資本をもってするより粗放な土地耕作よりも、はるかに高い程度で、より集約的な資本投資(intensivere Capitalanlage)を許すものである。」(ebenda, S.962) 第三部「主要原稿」第6章では、差額地代の異なる形態に対してその発生の様式にしたがって「差額地代Ⅰ」と「差額地代Ⅱ」という異なる名称を付与して、それぞれ別々に論じさらに両者の関連が問われているが、61-63年草稿では発生様式の異なる二つの差額地代は異なる名称をもって明確に区別されておらず、主として後の「差額地代Ⅰ」に相当する地代が論考の対象とされているのみである。1862年の段階では「差額地代Ⅱ」にかかわる複雑な問題にはまったくと言ってよいほど手が付けられておらず、このことが65年の草稿では絶対地代に対して差額地代の部分が長くなりそのなかでも「差額地代Ⅱ」が他の諸部分と比べて特に大きく膨らんだひとつの要因であろう(しかもその完成度が低く、しばしば見られる論述の混乱にエンゲルスは編集にあたってしばしば介入を余儀なくされたほどであった)。

ともかくこうして、「5 剰余価値に関する諸学説」の「g ローとベルトゥス氏」と「h リカード」においてはじめて、マルクスは絶対地代と差額地代の双方を含む地代の理論について一定の見方を固めたと言えるであろう(マルクスは「g」の「h」のなかの3箇所においてそれぞれやや異なった意味で彼が地代の理論についての検討を終えたという趣旨の文言を記している(Cf. ebenda, S.758, 813, 887)。おそらく「g」を書き始めたばかりの頃と思われる1862年6月18日付けのエンゲルス宛の手紙では、「今ではついに地代の問題も片づいた」と言われている(III/12, S.136)。また、これからおよそ3年半後の66年02月13日付け同宛ての手紙では、「僕は地代にかんする僕の理論的な研究を2年まえに終えた」(MEW, Bd.31, S.178)と言っている。これらの文言はマルクスの地代論に対するある種の見方を示唆しているであろう。)。これらの地代の両形態はともに、地主がその土地に対する

私的所有権を根拠に借地農業者から徴収する土地の賃貸料であり、その限りでは地代としての同じ性格を共有しているが、その共通性の上に両者の間には大きな違いもある。これまで見てきたところから両者の相違点は次のようにまとめることができるであろう。1. 絶対地代は農業と工業の関係から生じるが、差額地代は農業部門内部の関係から生じる。2. 前者はその発生も取得も土地所有の力に負うが、後者は土地所有とは独立に発生したものを土地所有者が取得するという関係にある。3. 前者は農産物価格の高騰の原因であるが、後者はその結果である。4. 前者は資本主義の下でも消滅しうるが、後者は私的所有の支配する資本主義と共にのみ消滅しうる。

#### h. 地代論の位置、「例証」から「転化」へ

さて、項目「g」と「h」の後、マルクスはリカードおよびリカード以後の経済学者たちについての「5 剰余価値に関する諸学説」での歴史的検討と後の『資本論』第一部および第三部に関連する雑多な主題の論述に立ち帰り、これらを最後のノート XXIII の終わりにいたるまで交互に繰り返して 61-63 年草稿を終えている。それは 1863 年 7 月はじめのことであった（佐藤 (1968)、43 ページ）。このあいだにさしあたって予定していた経済学の著作が当初の「経済学批判（第二分冊）」から「資本（論）」へと変更された（62 年 12 月 28 日付けのクーゲルマン宛の手紙、III/12,S.296）とはいえ、ともかくこの草稿をもとにして経済学の著作の続きを書きそれを出版するという計画には変わりはない。そこで、そのための準備として約二年の歳月を費やして書かれたこの草稿のなかの、当初の予定ではなく途中からの偶発的な事情により割り込んだ相当な分量の地代に関する部分を、この著作のなかでマルクスがどう扱おうとしたかが問題となる。マルクスは先に引用した 62 年 6 月 18 日付けのエンゲルス宛の手紙では、地代の問題は片づいた「といっても、この部分でそれをただ暗示しようと思っていない」と言っており、この時点ではロートベルトゥスとリカードの著作の批判的検討を通じたマルクス自身による地代論をめぐるいくつかの問題の解明は、「経済学批判」の続編を仕上げるという当面の課題とは関わりのないいわばやむをえない「一時的な逸脱」と捉えていた。しかしそれから一か月半後の 8 月 02 日付けでこの間の地代論研究を報告した同じエンゲルス宛ての手紙では、マルクスの地代論の扱いについての態度は大きく変化している（この手紙は 1851 年

01月07日付けのマルクスのエンゲルス宛の手紙(前出)とともに、マルクスの地代論研究の記録として重要な意味をもつ)。

マルクスはこの手紙の最初で、「いま僕がもくろんでいるのは、すぐにこの巻[『経済学批判(第一分冊)』の続きをなす次の経済学の諸作]のなかで地代論を、一章を設けて、すなわち以前に立てたひとつの命題の「例証」として、取り扱うということだ」(III/12,S.178)と言っている。「h リカード」の「リカードの地代論」のなかでも、「ここで問題なのは、ただ、価値と費用価格[生産価格]とに関する私の理論の例証として地代の一般的法則を展開することだけである」(II/3.3,S.907)と、上の手紙の文言と同趣旨のことが述べられている。両者はおそらくほとんど同時期に書かれたと思われる。これは、執筆中の草稿をもとに近いうちにできあがるはずの彼の経済学の著作に地代論を扱う章が含まれるということである。ただし、それは地代を独立のテーマとするのではなく、「以前に立てたひとつの命題の「例証」としてであった。この「以前に立てたひとつの命題」というのは、剰余価値の利潤への、利潤の平均利潤への、価値の生産価格(この手紙ではほとんどの場合「費用価格」と呼ばれている)への転化によって、「正常な平均価格」が価値から乖離する、という生産価格の理論にほかならない。マルクスは、地代の問題について彼が新しく得た見解をエンゲルスに披瀝し意見を求めるにさきだって、まずこの生産価格の理論について延々と説明を続けている。これは、この時点でのマルクスにとって生産価格論の新たな展開がいかに重要であったかを物語っている。地代論における彼の新たな発見も生産価格論との関連において大きな意味をもつものであった。そしてこの両者がリカードに対する批判において連動する。「リカードは価値と費用価格を混同している。[・・・]だから、彼は絶対地代を否定して、ただ差額地代だけを認めるのだ。」(III/12,S.180. 強調は原文)マルクスは自身の草稿以外ではこの手紙の中で初めて「絶対地代」と「差額地代」という用語を使用している(しかもあたかもエンゲルスにとってもすでにおなじみの用語でもあるかのように)。彼がこの用語を手紙で使用したのは、この手紙と一週間後の8月09日に同じエンゲルスに宛てた手紙の二回だけである(Cf. ebenda, S.190-3)。その後マルクスもエンゲルスもこの二つの用語を彼らの書簡のなかでまったく使用していない<sup>14)</sup>。

そして、上の文言につづいて、「すべての非農業資本の平均構成が  $c80, v20$  だと仮定す

れば、生産物は（50%の剰余価値率では）110で、利潤は10%だ」という仮設例をもちいた文章からはじめて、これよりも低い平均構成の農業資本においては剰余価値率が非農業資本と同じであっても利潤率は高くなるが、土地所有が利潤率の均等化をさまたげ農業部門で実現される超過利潤が土地所有者に取得され、これが絶対地代となる、というわれわれがすでに良く知っている論理をエンゲルスに示している。この数値例でマルクスが使用している数値は「リカードの地代論」の項で用いられているもの(II/3.3,S.931)と同じであり、手紙と草稿の当該個所が同じ頃に書かれたことを推測させる。農業において資本構成が低いのは労働生産力の発展程度が工業と比べて相対的に遅れているからである。この原因は、工業と農業の前提となる科学が（機械学のように）早くから発達したか（化学や地質学や生理学のように）発展が遅かったか、という相違にある。もしこのような論理的必然性のない歴史的状況が変化すれば「絶対地代はなくなる。」(III/12, S.181)

このようにマルクスは絶対地代の資本主義のもとでの消滅の可能性を直ちに認めているにもかかわらず、彼が62年8月上旬にエンゲルスに宛てた二つの手紙では、差額地代に比して絶対地代に圧倒的に大きな比重を与えて説明を行っている。差額地代については、02日付けの比較的長い手紙の最後の短いパラグラフのなかであたかも事のついででもあるかのように、「たんなる差額地代——それは資本がなんらかの他の投下部面ではなく土地に投下されるということから発生するのではない——には理論的には困難な点はない。云々」(ebenda, S.182)と簡単に触れられているにすぎない。この時点でのマルクスにとって絶対地代が重要であったのは、第一に、それが土地所有というものの社会的害悪を際立たせるからである。「絶対地代」を僕の言うように考えれば、土地所有はじっさい（ある種の歴史的事情のもとでは）原料生産物の価格を高くするのだ。これは、共産主義的に、大いに有用だ。」(ebenda. 強調は原文) また第二に、絶対地代は、マルクスが1862年6月からの短期間のあいだに偶然の経緯から発見した、差額地代とは異なる新たな形態の地

---

(14) エンゲルスはマルクスから彼の新しい仕事の成果について報告を受け意見を求められれば、それに対して遅滞なく彼の率直な感想を返すのが通例であったが、マルクスのこの二通の手紙に含まれる理論的な問題について彼はまったく返事をしていない。こうしたこともあって、先に詳論したようにこれらの用語はエンゲルスが30年以上後の1894年の秋に『資本論』第三巻を刊行するまでは、マルクスの草稿や短いノートと上のマルクスの二つの手紙のなかだけにしか存在していなかったのである。

代であったからであり、さらにこの発見を可能にしたのがそれに先立つ生産価格論の形成（リカード価値論の批判、経済学批判のひとつの大きな成果）であったからである。02日付けの手紙の構成は、この両者がマルクスにとって不可分であることを示している。またいずれもそれ自体として大きな意義をもつものであった。だから、彼はこの手紙の最初で、「地代論を、一章を設けて、すなわち以前に立てたひとつの命題の「例証」として、取り扱う」、と言ったのである。

「例証」として地代論を明確に位置づけたプランは、ノート XVIII のなかの「5 剰余価値に関する諸学説」の最後の「o リチャード・ジョーンズ」についての項目の途中に } } に囲んで次のように書かれている。「第三篇「資本と利潤」は次のように分けること。一、剰余価値の利潤への転化。剰余価値率と区別しての利潤率。二、利潤の平均利潤への転化。一般的利潤率の形成。価値の生産価格への転化。三、利潤および生産価格に関する A. スミスおよびリカードの学説。四、地代。（価値と生産価格との相違の例証。）五、いわゆるリカード地代法則の歴史。六、利潤率低下の法則。A. スミス、リカード、ケアリ。七、利潤に関する諸学説。シスモンディやマルサスを「剰余価値に関する諸学説」のうちに入れるべきかどうかの問題。八、産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本。九、収入とその諸源泉。[・・・]<sup>(15)</sup>(II/3.5, S.1861)62年12月に書かれたこのプランの四番目の地代の項は、同年8月に表明された地代論の扱いについての構想を具体的に示すものである。続く五番目の項目には、アンダーソンからリカードにいたる差額地代の歴史を批判的に検討した「g ロートベルトゥス氏」のなかの二番目の項目「リカードの法則の発見の歴史に関する覚え書き」に近いタイトルが付されている。マルクスがここで具体的に何を書こうとしていたかは分からないが、タイトルだけからは差額地代論を歴史的に扱おうとしていたようにも思われる。もしそうだとすれば、「例証」がもっぱら絶対地代にかかわるものであったとしても、マルクスがノート XI で研究した差額地代論がこのプランでまったく無視されていたわけではないであろう。

マルクスはこのように62年のあいだは地代論を「例証」として扱うつもりであったが、

---

(15) このプランの項目九までの内容は、地代についての扱いと学説史的部分を除くと、3年後に執筆された第三部「主要原稿」全体の構成とほぼ一致している。

実際に彼が3年後に執筆した第三部「主要原稿」では、地代は「例証」としてではなく「超過利潤の地代への転化」と題される第6章で取り上げられている。またこれに対応して、剰余価値の利潤への転化から始まって生産価格論を展開している「主要原稿」の最初の二つの章では、絶対地代についての説明もその「例証」としての使用もなされていない。この範囲では、地代については第2章「利潤の平均利潤への転化」の終わりの方にわずかに次のような言及があるだけである：「しかし、超過利潤は、[・・・]ある生産部面がその商品価値の生産価格への転化をしたがってまたその利潤の平均利潤への引き下げを免れる場合に発生しうる。地代に関する章において、われわれは超過利潤の[・・・]諸形態のさらに進んだ形成を考察しなければならないであろう。」(II/4.2,SS.272-3. 強調は原文。Cf. II/15, S.198)したがって「主要原稿」ではもはや地代論を「例証」とするという構想は放棄されて、地代は第5章「利子と企業利潤とへの利潤の分裂」の次の章で上記のようなタイトルの下に利子とならぶ(超過)利潤の分岐形態として扱われることになっている。このような「例証」から「転化」への地代論の扱いの変化はなぜ生じたのであろうか。

マルクスが62年12月に上記のプランを書いた時点では、彼にとって地代が(超過)利潤の転化形態でありもともとは利潤の一部をなしていたものであることは明白であったはずである。この点では地代は利子と変わらない(いずれもその根源は資本の生産過程で遂行される剰余労働の生み出す剰余価値にある)。にもかかわらずこのプランを見ると、利子は項目八において利潤の分岐形態としての取り扱いをすることが明確に示されているのに対して、地代には「主要原稿」第6章とは異なってこのような扱いが予定されていない。「主要原稿」で地代がもはや「例証」ではなく利子とならぶ独立の一項目をなすことになった理由は、利子に関する項目八の次の項目九「収入とその諸源泉」にあるように思われる。ここでの「収入」にいかなるものが含まれる予定であったのかについては、同じタイトルをもつ「主要原稿」の第7章と、このプランに先立ってすでにノート XV の891ページから950ページに書かれていた同じタイトルの項目(II/3.4,SS.1450-1539)、これらの内容からヒントが得られるであろう(II/4.2の編集者は前者の内容は後者の内容の一部依拠しているとしている。Cf. II/4.2,S.1354.特にその根拠は示していないがおそらく前者のなかに後者から取ったと思われる部分があるからであろう)。マルクスがここで考えていた主題は、資本主義経済のなかで生活する経済当事者たちがその階級的帰属のいかに

かわりなく、彼らの生活の根拠である所得の起源について抱く物象化された意識の批判的解明であった（同時にそれはこのような意識をそのまま理論として表現する「俗流経済学」（項目十一のタイトル）に対する批判でもあった）。賃金は労働から、企業利潤と利子は資本から、地代は土地から、それぞれ独立に生じる（「三位一体範式 (trinitarische Formel)」）。こうしてそれらが共通に有する源泉としての生産過程において労働者の労働が生み出す価値・剰余価値が忘却・隠蔽される。こうした意識がどのようにして生まれるのかを、マルクスは『資本論』全三部の理論的成果をもって第三部の最後の部分で批判的に解明しようとした。このような構想をマルクスは62年12月のプランを書く前から抱いていたが、それを実際に実現しようとする、利子とならんで（その両形態を含む）地代についても単に「例証」としてではなくそれ自体として独立に理論的解明を与えておく必要にせまられたのではないだろうか。こうして「主要原稿」では62年12月のプランにはなかった地代についての独立項目が利子の直後に入り込んで第7章「収入とその諸源泉」の理論的前提を整えることになったと思われる。また、こうした位置づけを与えられる地代論には絶対地代と差額地代の双方についての解明が不可欠であったであろう。

マルクスが1862年の夏の短い期間に地代の問題に集中的に取り組んでいたその直後の同年9月には、65年後半におけるマルクスの再度の地代論との取り組みにおいて大きな役割を演じることになるリービッヒの著作の新版(Liebig (1862))が16年ぶりにドイツで刊行された。これはもちろん単なる偶然には違いないが、マルクスの地代論研究にとってはきわめてよいタイミングであったと言えるであろう。マルクスは3年後にこの著作を丹念に研究し高く評価しそこから大きな影響を受けることになる。その前後の62年から65年にかけてマルクスの地代論に根本的な改変が加えられたとは思えない<sup>(16)</sup>が、いずれにしても本節で見てきたマルクスの地代についての論考および先行者たち（とりわけ、アンダーソン、リカード、およびロートベルトゥス）の理論に対する彼の批判的検討には、次節で見るリービッヒが農業について提起したような観点はまったく含まれていなかったと思われる (Cf.Saito (2016a),S.192)。リービッヒからの影響によってそれがどのようにどれほど変

---

(16) これまで国内外でなされてきたマルクスの地代論の研究で『剰余価値学説史』第二巻と『資本論』第三部の地代論が一体のものとして扱われているのも理由のないことではないであろう。

化したのかにも留意しながら、次節ではマルクスの唯一の体系的に展開された地代論草稿について見て行くことにする。また、マルクスの近い時期における同じ地代論についての考察を行うことになるので、これまで述べてきたこととの内容的な重複は極力避けるようにしたい。

### 3. マルクスの地代論の構造とリービッツの農業化学 ——『資本論』第三部「主要原稿」第6章——

#### a. 「主要原稿」第6章の執筆

1863年7月に二三冊のノートを書き終えたマルクスは、その翌月にはこれらのノートに書きためていた草稿をもとに65年末まで続く『資本論』全三部の最初の原稿の執筆に取りかかった。この時期に新たに書かれた草稿の全体は現在では新メガの第IV部門第4巻の第1・第2分冊(II/4.1,2)に収録されている。この執筆は中断(とりわけ頻発する病気と64年9月にロンドンで設立された国際労働者協会のための「巨大な仕事」(II/15,S.7)による)をとめないながら順不同で進められた。このために草稿の各部分の執筆の時期や順序について未解明の部分が残されているとはいえ、新メガの各分冊の編集担当者たちの努力によって解明されている事柄も多く存在する。ここでは、地代を主題とする「主要原稿」<sup>(17)</sup>第6章の執筆に関連する事柄について必要最小限ふれておきたい。

マルクスは63年8月から書き始めた原稿が一定の進捗を見せたと思われる65年3月末にハンプルクの出版社オットー・マイスナーと著作『資本論』の出版契約を結んだ。1859年6月に刊行した『経済学批判(第一分冊)』はベルリンのドゥンカーからの出版であったが、この時にはドゥンカーとの仲介にあたったラッサールはすでに前年8月に死亡していた。原稿は遅くとも同年5月末までに出版社に引き渡すことになっていた。マルクスはこのころ『剰余価値学説史』を含む『資本論』全四部を二巻にわけて、しかも一度に出版

---

(17) 「主要原稿」(Hauptmanuskript)という表現は本稿でこれまで何度も使用して来たが、これはエンゲルスが彼の編集・刊行した『資本論』第三部への序言で最初に使用した(Cf. II/15,S.7)用語である。「主要原稿」という呼び名は、「第三部のためには、たったひとつの、しかも欠けたところのまったく多い最初の草案(nur ein, noch dazu äußerst lückenhafter, erster Entwurf)があっただけだった」(ebenda,S.6)ことに由来する。第二部のためにはマルクスは八つの原稿を残したが、第三部の草稿はひとつしか書かれなかった。

するつもりだった。このため彼は原稿の完成を急いだ。しかし実際には学説史的部分を除く全三部の原稿を65年の12月末にやっと仕上げることができたにすぎなかった。「この「呪われた」本はと言えば、それはこうなっている。それは12月末までにできあがった。」（66年02月13日付けのエンゲルス宛の手紙。MEW, Bd.31, S.178. 強調は原文）これは66年に入ったらすぐにでも第一部「資本の生産過程」の最終仕上げ原稿の作成にとりかかりなるべく早期にマイスナーへの原稿引き渡しをはかるために、マルクスがみずから設けたタイムリミットだったのであろう。彼は実際にそうした（「僕は清書と文体の手入れをちょうど1月1日から始めた」（ebenda, S.179. 強調は原文））が、それでも第一部の途中までの原稿をマイスナーに送ることができたのは66年11月中旬のことだった（以上、出版契約以降の経過についての記述は佐藤（1968）の47-51ページによる）。第6章を含む「主要原稿」の後半部分はこのような前後関係にあった非常に厳しい時間的切迫のなかで書かれた。現在残されている第6章の草稿（Marx\*91\*）にもまたこれをもとに活字化された新メガの当該個所にもいくつかの点からその痕跡がうかがわれる。おそらくこうした事情が原稿の形式や内容にも影響を与えていると想像される。

マルクスは1865年7月31日付けのエンゲルス宛の手紙で『資本論』の原稿の進捗状況について次のように報告している：「理論的な部分（はじめの三部）を完成するためには、まだ3つの章を書かなければならない。」（III/13, S.510）すなわち全三部のうちまだ書かれていないのは第三部の最後に位置する第5章（利子）・第6章（地代）・第7章（収入）の3つの章であった。この3章はこのときからちょうど5か月後の12月末には全部書き上げられたのであるが、仕事は健康状態やインターナショナル総評議会での活動によりしばしば中断を余儀なくされながら進められた。それに最初の利子生み資本を扱った第5章が残りの2つの章を合わせたよりも長くなり、この第5章を終えて第6章に取りかかることができたのは12月に入ってからであったと推定される。ノート406ページから始まる第6章の415ページ（II/4.2, S.683）に『モーニング・スター』の1865年12月14日号からの引用があり、第6章の大部分をなすこの個所から後の部分がこの日付より前に書かれたということはありえないからである<sup>18)</sup>。

このように、第6章は最後の第7章とあわせて12月末の3週間程度の短期間のうちに大急ぎで書かれたのである。第6章のなかにはかなりの数の注が含まれるが、そのうちの

いくつかにはただ関連すると思われる著者の名前や著作名またはキーワードだけしか書かれていないものや、注番号だけで何も書かれていないものもめずらしくない。これは、マルクスが時間がなくて注の内容を入れるのを後回しにしたためと思われる。また、「主要原稿」を収録する II/4.2 の編集に加わったシュニクマン (Schnickmann (1987)) によれば、マルクスは第 6 章を最後まで書き終える少し前に (「c. 絶対地代」の終わりの方で) この章の執筆をいったん打ち切って第 7 章を執筆した<sup>(18)</sup> (ebenda, S.117)。この第 7 章の草稿の状態についてエンゲルスは 1994 年刊の『資本論』第三部に付した「序文」で次のように報告している：「最後に第七篇は完全に書き上げられてはいたが、ただ最初の草案でしかなく、印刷のできるものにするためには、まずその果てしなくもつれあったいくつもの章句を分解しなければならなかった。最後の章ははじめがのほうがあるだけである。」(II/15, S.10) このためエンゲルスは第 7 章の編集にあたって相当の手入れをしなければならなかった。このエンゲルスの証言に、マルクスはこの章の執筆にあたって 61-63 年草稿のノート XV にすでに書いていた同じタイトルの「収入とその諸源泉」に依拠したという II/4.2 の編集者の証言 (Cf. II/4.2, S.1354. 前出) を重ね合わせてみると、時間的な切迫のなかで「書けるところから書いていく」「使えるものは使う」(そして、やむをえない部分は後に残しておく)、という書き方をしていたマルクスの姿が見えてくるようである。このことは第 6 章にも当てはまるように思われる。

上にふれたように第 6 章の注のうちのかなりのものはほとんどないしまったく中身が記入されていないことに加えて、原稿用紙の使用方法にも変則性が見られる。マルクスは通

---

(18) 「主要原稿」は全ページに初めから終わりまで 1 から 574 までの一貫した通し番号が振られている。第 6 章は 406 から 527 ページ。ちなみに第 5 章は 286 から 404 ページ。後述するように、マルクスの原稿用紙中の空白の取り方や原稿の精粗の違い、さらにマルクスの付したページ番号に飛びや重複があることにより、原稿ページの数だけから原稿の実質的な分量を比較することはできない。

(19) ただし打ち切った個所についての判断理由は与えられていない。しかし第 6 章が途中で打ち切られて、同章のその後の部分の前に第 7 章が書かれたらしいことはシュニクマンが挙げている次の状況からも推測できる。すなわち、マルクスは通常草稿のページ数を用紙の上の端に記入していたが、第 7 章に限ってページ数が用紙の上中央に入っている。これはエンゲルスのやり方であった (ebenda, S.117-8)。おそらく、マルクスは第 7 章を執筆したとき未執筆の第 6 章の最終ページが未確定だったので第 7 章にページ数を入れることができないまま放置して置いたので、エンゲルスが後から書き込んだのであろう。シュニクマンはこのように第 6 章と第 7 章の執筆の経過についての彼の推測を裏付けている。

常、他の著述家の著作物からの抜粋をしたり統計・報告書からの資料の収集をするときには、各ページの下までびっしりと書き込み、自分で原稿を書く場合には後で注を入れたり引用や資料を追加したりするためのスペースとするために、各ページの下半分は空白のままに残しておいた (Cf. Schnickmann (1987), S.120-1)。しかし第6章の原稿のオリジナル画像を Marx\*91\* によって見てみると、ノート 406 ページから始まる第6章のはじめのほう（特に「a. 緒論」の部分）にも下まで原稿で埋められているページがいくらかあるが、501 ページから最後の 527 ページにいたる 28 ページ (513 ページが重複しているため) のうち、16 ページでページの下まで原稿が届いている。501 ページは II/4.2 では S.787 にあり、エンゲルス版『資本論』第三部では第40章「差額地代の第二形態（差額地代 II）」の半ばあたり（差額地代 I から II に移行してノート数ページ分書き進んだところ）の個所に相当する。そして草稿の 527 ページで「b. 差額地代」（エンゲルス版では最終第44章「最劣等地にも生じる差額地代」）が終わっている。このように 501 ページを境にして、第6章の原稿の書き方が（原稿としての執筆からのちにふたたび原稿として書き直すためのいわば素材の書き下しへと）大きく変わっていることを考えると、マルクスが第6章を一時中断して第7章に移ったのはシュニックマンの言うように「c. 絶対地代」の終わりの方だったのではなく、「c. 絶対地代」を終えて「b. 差額地代」に入り差額地代 I から II へと移ってからだったのではないか。本稿前節で見たように「差額地代 II」は 61-63 年草稿ではほとんど手が付けられていなかった。マルクスはこの問題領域にノート 499 ページ (II/4.2, S.785) で初めて踏み込んで執筆を継続しようとしたが、おそらく困難を感じて一時これを中断してとりあえず第7章に移ろうとしたのではないだろうか。

反対に、1862 年から何度も「かたづけた」とマルクスが言明していた「c. 絶対地代」を扱った草稿部分（ノート 418 から 473 ページ。ebenda, SS.690-753）で、原稿が下まで書かれているのは 445 ページ (ebenda, SS.720-2) のみであり、さらに「b. 差額地代」が始まる 474 ページ (ebenda, S.753) から「差額地代 II」の冒頭の 500 ページの終わりまで (ebenda, S.787) は全ページの下に余白が残されている。絶対地代と差額地代 I はいずれも、61-63 年草稿でマルクスがすでに繰り返し突っ込んで議論していた理論領域に属しており、比較的筆が進みやすかったのではないだろうか。これに反して「a. 緒論」と「b. 差額地代」の後半部分はマルクスにとっていわば未開拓の領域をなしており、その執筆に彼

は相当の難渋を感じまた時間を要したのではないだろうか。

ところで、エンゲルス編集の『資本論』第三部第六篇の構成は、地代論の課題と方法を述べた第37章「緒論」に続いて、第38章から第44章までの差額地代論、第45章の絶対地代論、第46章の鉱山地代等の非農業地代論と土地価格論、そして、最後の第47章の資本主義地代の歴史的生成についての考察、となっている。しかし、地代論のこの構成はマルクスの草稿とは大きく異なっている。エンゲルスも編集者「序文」でこのことを証言している(II/15,S.10)。彼が地代論の構成を大きく入れ替えたのは、草稿の第6章の終わりの方(II.4.2,SS.816-7.エンゲルス編集版では第43章「差額地代Ⅱ——第三の場合 生産価格が上昇する場合 結論」の中ほど。II/15,S.705)で、マルクスが「全篇の計画を簡単に再説」(ebenda, S.10)したことによる。この「再説」というのはマルクスが地代論の全体の大まかな構成を示した一種のプランである。それは次のように書かれている：「地代を取り扱うさいの諸項目は次のとおり：A) I) 差額地代一般の概念。落流による例解。それから本来の農業地代への移行。II) 異なる地片の異なる豊度から生じる差額地代Ⅰ。II) 同じ土地での逐次的資本投下から生じる差額地代Ⅱ。III) これらの地代の利潤率への影響。B) 絶対地代。C) 土地価格。D) 地代についての結論的考察。IIは再び次のように分かれる、 $\alpha$ ) 定常的生産価格の下での差額地代、 $\beta$ ) 生産価格が下落する場合の差額地代、 $\gamma$ ) 生産価格が上昇する場合の差額地代。(そして $\delta$ ) 超過利潤の地代への転化。)」この内容についてエンゲルスが「この再説は編集上非常にありがたいものだった」(ebenda)と述べている通り、それはこの篇の編集にあたって導きの糸として役立てられたものと思われる。すなわち、そこに示されている地代論の構成はほぼ現行版のそれと一致している<sup>(20)</sup>。エンゲルスは遺稿中に示されたマルクスの「指示」に忠実に従って、地代論草稿の順序をひっ

(20) ただしマルクスの草稿自体にはこのような詳細な見出し項目はなく、「ほとんど一冊の本をなしている」(66年02月13日付けのエンゲルス宛の手紙。MEW,Bd.31,S.178)ほどの長さが緒論と絶対地代と差額地代の三つに区切られているにすぎない。エンゲルスがマルクスの地代論草稿を編集するにあたって指針としたと思われるこの「再説」は、エンゲルスの編集したテキストの内部構成として再現されているといつてよいが、細部には若干の不一致がある(その最たるものは、「D) 地代についての結論的考察」が内容は略保持したままで第47章(エンゲルスの編集では最終章)「資本主義的地代の創世記」とタイトル変更されていることである)。鳥居(1997)は、個別の論点では必ずしも筆者と見解を共有していないが、エンゲルスの編集による『資本論』第六篇の地代論の細部の構成について有益な検討を加えている。

くり返したのである。

たしかにマルクスは絶対地代から差額地代へという順序で草稿を書いていたことは間違いないが、しかし彼はこの順序の逆転を、「再説」の位置している草稿全体の終わりに近いところ、つまり草稿を書き終える段階になってはじめて考えついたのではない。マルクスが1862年の時点で絶対地代を圧倒的に重視していたことは先に見たとおりであるが、彼が第6章の執筆開始にあたってこの章に与えたタイトル「超過利潤の地代への転化」を見れば、当初はこの章が絶対地代論だけからなると考えていたのに途中から考え直して後で差額地代論をつけ加えた（Cf. 竹永 2010, 130 ページ。このような解釈は誤っていた。）、と考えることはできないであろう。また、「a. 緒論」にすぐに続いて「c. 絶対地代」と題して次の項目に移行するにあたって、彼はその最初のパラグラフに「(b. の項目の下にあらかじめ差額地代を論じるべきである、このことは c. の議論に前提されている。）」(II/4.2.S.690. 強調は原文) と、本文の内容とは区別される但し書きのかたちで、最終的には、ここから始まる絶対地代論がその後で書かれるはずの差額地代論の後に置かれることを明言している。だから項目番号 b, c が最初から執筆順序とは反対に付けられていたのである。それでは、差額地代論と絶対地代論からなる第6章がこの順序で展開されるべきであるとあらかじめ明確に考えていたにもかかわらず、マルクスはなぜ草稿での執筆順序を逆転させたのか。その答えは、先に見た第6章の草稿の状態や第6章と第7章の執筆の過程についての考察からほぼ明らかであるように思われる。

1840年代にまで遡って長いタイムスパンで見れば、マルクスにとって地代とは（その名称はなかったが）何よりも差額地代であった。彼は長いあいだ特にリカードの地代論への批判を通してこの形態の地代について思考を重ねていた。だが、絶対地代は彼がこの名称を（差額地代と双対的に）創案した1862年の夏になってはじめて、彼の経済理論の一部となった。この意味ではマルクスにとっては差額地代論が絶対地代論に先行したと言うことができる。しかし、この62年からの短いタイムスパンにおいてマルクスが最初に「かたをつけ」「研究を終えた」のは絶対地代論の方であった<sup>(21)</sup>。このような経過から65年の

---

(21) マルクスの研究過程における二つの地代形態の複雑な位置づけについては鳥居 (1997) でも論じられている (同、159 ページ)。マルクスの草稿の編集 (とりわけ第6章における順序のひっくり返し) にあたって、エンゲルスがこのような経緯を意識した形跡はない。

時点においては、絶対地代論の方が彼の「武器庫」に揃えられていた理論装置として差額地代論よりも重要であったし彼にとって扱いやすかったと思われる。差額地代論についてはリカード批判後の未決の問題がなお残っていると考えていたのではないか。このような状態で両形態を含む自身の地代理論を体系的に論述するとすれば、両者の論理的順序とはかかわりなく彼にとって書きやすく感じられたのは絶対地代論の方だったであろう。後に置くことを最初から予定しておきながらマルクスがさしあたってまず絶対地代論から書き始めた理由は、およそ以上のように考えられるのではないだろうか。

## b. 1865年のマルクスの抜粋ノート

マルクスは以上にみたように非常に速いスピードで『資本論』の草稿を書き続けたが、その間も大英博物館での読書を続け草稿執筆に必要な新しい資料から大量の抜粋をとり続けていた。「僕は昼間は博物館に行き、晩に書いた。」(MEW, Bd.31, S.178) 彼が「主要原稿」の地代に関する章を執筆していた時期に蓄積した抜粋を収めたノートは、現在アムステルダム社会史国際研究所 (IISG) のインターネットサイトから他のマルクス・エンゲルスのオリジナル資料とともに公開されている (ノート番号 B106. この画像を収めたファイルは Marx\*217\*)。このノートは 360 ページあまりからなる大部のもので、「主要原稿」後半部分の執筆時期とほぼ重なる 1865 年 8-9 月から 66 年 2 月ころまでに作成されたと推定されている (Sperl (1995))。このノートには 25 件あまりの書籍・新聞・報告書からの大小の抜粋が入っておりその主題もまちまちであるが、その多くを占めるのは当然のことながらマルクスが同時期に関心を抱いていた地代・土地所有・農業をテーマとする書籍からのものである。これに対して同時期に執筆していた第 5 章のテーマである利子に関連する資料からの抜粋は極端に少ない。おそらくこの章のためにはマルクスが以前から蓄積していた資料が使われたためであろう。こうしてマルクスの抜粋ノート B106 の内容は全体として地代論に集中しているということが出来る。「主要原稿」第 6 章にはこのノートに入っている抜粋が各所で明示的・暗示的に生かされており、第 6 章 (さらに広げて言えば、マルクスの地代論——なぜならそのまとまったテキストはこの第 6 章だけだから——) の研究にはこの抜粋ノートの参照が不可欠である<sup>22)</sup>。

だが残念ながらこれらの抜粋を収録する予定の新メガの第 IV 部門第 18 巻 (IV/18) はい

まだ刊行されていない（2019年3月現在）。このため、繙読のきわめて困難なマルクスのオリジナル・ノートの画像データと1920-30年代の旧メガの時代にモスクワで作成された解読タイプ原稿、それに、入手可能な場合にはマルクスが抜粋した元の著作の同じ刊本、これらを付き合わせながら抜粋の内容を確認してゆくほかない。特別な訓練を受けたドイツ語ネイティブでなければほとんど役に立たないマルクスの手書きの抜粋ノートも、これらの補助手段を一緒にもちいれば反対に解読原稿の細かいミスを発見したりすることも可能になる。さらに重要なのは、マルクスが一度取った抜粋を後で見返した時に彼が重要と考えた個所に鉛筆で下線や傍線を施していることである。これらの個所はオリジナル・ノートでなければ確認できないし、こうした確認はノートの内容を細部まで読むことのできない非ネイティブにも可能である。

では具体的にマルクスはどのような書籍から抜粋したのであろうか。彼の地代論草稿のなかで引用・言及されていて、この草稿を研究するために重要であり不可欠と思われる若干のタイトルだけを、B106に抜粋されている順に、また抜粋ノートに占める個所（B106の表紙にエンゲルスが付したリストによる）とともに、以下に示しておこう。これらのうちリービッヒの著作以外は邦訳されていないようである。

J. v. Liebig, *Die Chemie in ihrer Anwendung auf Agricultur und Physiologie*, Braunschweig 1862 (Liebig1862). SS.27-134

L. Mounier, *De L'Agriculture en France d'après des documents officiels*, Paris 1846. SS.135-182

L. de Lavergne, *The Rural Economy of England, Scotland and Ireland*, Edinburgh and London 1855. SS.203-239

H. Passy, *Rente du Sol*, 1853 [Art. aus Coquelin et Guillaumin, *Dictionnaire de*

---

(22) これに対して、61-63年草稿のノートX-XIIで地代論と取り組んだ時期には、この取り組み自体が予想外のことであったためか、マルクスは草稿執筆のかたわら関連資料を読み漁るということはまったくしていない。この時に彼が参照した文献は、ロートベルトゥスの著作を除けばすべてすでにこの時以前に読んで知っていたものばかりであった。この意味でも65年の後半における、新たな抜粋ノートの作成に裏打ちされた草稿の執筆はマルクスの地代論研究においてそれまでに例のなかったことであった。後に見るように、その後もマルクスはこの時の地代論研究に関連してさらに多方面の新しい文献の研究を続けたが、しかしそれは新たな草稿の執筆つまり彼の地代論の新たな展開に結びつくことはなかった。

*l'Economie Politique* T. I-II. Paris 1853]. SS.259-272

J.L. Morton, *Treatise on the Resources of Estates*, London 1858. SS.286-297

J.F.W. Johnston, *Notes on North America*, 2 vol., London 1851. S.345-362

以上6点の最初のリービッヒの著作からの抜粋の前に65年10月23日付けの『デイリー・ニュース』からの抜粋があり、リービッヒからの抜粋はこの日付以降に作成されたことは明らかである。また、Johnstonからの抜粋はノート B106 のほとんど最後に位置している。つまりこれら6点の著作からの抜粋はノート B106 のほとんど全体にわたってなされている。これらがすべて12月末までに作成された「主要原稿」第6章のなかで引用ないし言及されていることから、B106 の330ページあまりをカバーする主要部分の抜粋は10月下旬からの2か月たらずのうちに作成され、続いて12月中旬に入ってから書き始められた第6章に利用されたということになる。61-63年草稿においてはまったく言及されていなかったこれらの著述家とその著作は、すべてマルクスが第6章の執筆を目的として研究したものであった。ただし彼はリービッヒとジョンストンの仕事は早くから読んで高く評価していた。1851年10月13日付けのエンゲルス宛の手紙で彼は後者のことを「いわばイギリスのリービッヒなのだ」(III/4, S.232)と呼び、エンゲルスに上のリストに最後に挙がっているジョンストンの51年の著作を読むように勧めていた(前述)。しかしマルクスがこの著作を実際に読んだのは65年の終わりのころが最初だったようである。また同じころに、マルクスはリービッヒの同じ著作の第四版(ただしこの時にはタイトルの最初の部分が *Die organische Chemie...* となっており内容も第七版とは大きく異なっていた)を読み抜粋を取っている(IV/9)。

さて、上のリストを見ると最初に来るリービッヒからの抜粋だけがノートの100ページ以上のスペースを占めておりマルクスがいかにこの著作を重視していたかが分かる<sup>23)</sup>。実際、草稿第6章のなかでも何度も彼の名と著作に言及している。これと対照的な扱いを受けているのが Mounier の著作である。上のリストではエンゲルスの記述にしたがって、

---

<sup>23)</sup> Ternowski (1985) は、Schnickmann (1987) とともに、「主要原稿」を収録する II/4.2 が準備中であった時代の仕事であり、マルクスの地代論研究と農業化学との関係に焦点を当てた、現在でも学ぶところのある先例の(少)ない包括的な研究として評価できる。

Mounier からの抜粋が B106 に占めるスペースは 50 ページ足らずとなっているが、実際にはこの後にも他の著述家たちからの抜粋をはさみながら Mounier の著作からの抜粋は飛び飛びに続いている。とりわけ、彼が示したフランス農業に関する多数の数表がマルクスの手によって細かく筆写されているのが印象的である。これらを合わせると Mounier からの抜粋は B106 のなかでリービッヒに次ぐ大きな位置を占めることになる。にもかかわらず第 6 章のなかでは彼の名前が 2 度記されているだけである。マルクスがこのような扱いをしたのは、草稿第 6 章の執筆に時間的余裕がなかったことに加えて、この著作がマルクス本人によって最終的に仕上げられることなく、残された草稿をもとにしてエンゲルスの編集によって作られたことにその根本的な理由がある。

この点についてエンゲルスは『資本論』第三部への「序文」の中で次のように述べている。「引用文や典拠は、すでに第二部でもそうだったように、第一部よりもずっと少なくなっている。〔・・・〕原稿のなかで以前の経済学者たちの理論的な言説の参照が指示されているところでは、たいてい名前だけがあげてあって、引用箇所そのものは最後の手入れのときに書き込まれることになっていた。それはもちろんそのままにしておくよりほかになかった。」(II/15, S.11) すなわちマルクスは、草稿執筆に生かすために書かためておいた膨大な抜粋ノートを利用するにあたり、草稿ではその内容をいちいち転記せずに著者名や著作名だけを摘記しておいて、印刷用原稿を最終的に仕上げる段階で抜粋ノートに含まれる引用文から適宜必要な個所を本文中に入れていくというやり方を取っていたのである。このため、ノート B106 の内容をその作成時期とほぼ並行して書かれた草稿と対比してみると、抜粋ノートで大きく取り上げられている著者や著作のうちのあるものは、それにもかかわらず、一見したところ『資本論』第三部の関連個所では非常に軽く扱われているかのような印象を与えることになった。しかし、抜粋ノートでは大きく取り上げられているのに草稿中ではほとんど無視されているように見える著者・著作であっても、最終仕上げの段階では異なった扱いとなったケースも少なくなかったであろう。いずれにしてもはっきり言えるのは、抜粋ノートと草稿の間での取り上げ方のこうした落差が、必ずしもマルクスの当該諸著作・著者に対する見方（評価、草稿それぞれの個所の内容との関連性）をそのまま表現しているのではない、ということである。

## 参考文献目録

### 1. 第一次文献

- [Anon.], On the Principles of Political Economy and Taxation. By David Ricardo, Esq. Second Edition. London, 1819, *The Farmer's Magazine: A Periodical Work, exclusively devoted to Agriculture and Rural Affairs*: 1819. Vol. XX, Edinburgh Monday, 3. May, 1819. (No. LXXVIII.), Branch II. Review of Agricultural Publications. Art. I
- [Anon.], Cursory Remarks on the Theories of Messrs Ricardo and Torrens, *The Farmer's Magazine: A Periodical Work, exclusively devoted to Agriculture and Rural Affairs*: 1820. Vol. XX, Edinburgh Monday, 8. May, 1820. (No. LXXXII.), Branch I. Original Communications
- Craig, J.(Craig1821), *Remarks on some fundamental Questions in Political Economy*, Edinburgh, Constable, 1821 [pp.128-37]
- Engels, F. (I/3), Werke, Artikel, Entwürfe bis August 1844, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 1ste Abteilung, Werke, Artikel, Entwürfe Band 3, Dietz Verlag Berlin 1985
- Liebig, J. v.(Liebig1862), *Die Chemie in ihrer Anwendung auf Agricultur und Physiologie*, 7te Auflage, Braunschweig, Friedrich Vieweg und Sohn, 1862 (リービヒ『科学の農業および生理学への応用』吉田武彦訳、北海道大学出版会、2007年 [Zöller 編第九版、1876年より])
- Malthus, T.R.(Malthus1815) *An Inquiry into the nature and progress of rent and the principles by which it is regulated*, London, Murray (in: The works of Thomas Robert Malthus, volume seven, Essays on political economy, edited by E.A. Wrigley and David Souden, Routledge, 1986, pp.115-45) (マルサス『穀物條例論および地代論』楠井隆三・東嘉生訳、岩波文庫、1952年)
- Karl Marx/ Friedrich Engels Papers \*91\*(Marx\*91\*), Inv. nr. A 80c [A 54], ARCH00860, International Institute of Social History, Amsterdam
- Karl Marx/ Friedrich Engels Papers \*217\*(Marx\*217\*), Inv. nr. B 106 [B 98], ARCH00860, International Institute of Social History, Amsterdam
- Marx, K.(Marx1847), *Misère de la philosophie, réponse à la philosophie de la misère de M. Proudhon*, Bruxelles, 1847 (in : *Karl Marx Œuvres Economie I*, préface par François Perroux, édition établie et annotée par Maximilien Rubel, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1972. *Karl Marx – Friedrich Engels Werke*, Band 4, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1959)
- Do. (Marx1953), *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie: Rohentwurf 1857-1858, Anhang 1850-1859*, Dietz Verlag, Berlin
- Marx, K. (II/1, 1·2), Ökonomische Manuskripte 1857/58, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung, “Das Kapital” und Vorarbeiten Band 1, Teil 1, 2, Dietz Verlag Berlin 1976, 1981
- Do.(II/3.3), Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1861-1863). Teil 3, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: “Das Kapital” und Vorarbeiten Band 3.3, Dietz Verlag Berlin 1978
- Do.(II/4.2), Ökonomische Manuskripte 1863-1867, Teil 2, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: “Das Kapital” und Vorarbeiten Band 4.2, Dietz Verlag Berlin 1992
- Do.(II/4.3), Ökonomische Manuskripte 1863-1868, Teil 3, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: “Das Kapital” und Vorarbeiten Band 4.3, Akademie Verlag 2012
- Do.(II/5), Das Kapital. Kritik der Politischen Ökonomie. Erster Band, Hamburg 1867, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: “Das Kapital” und Vorarbeiten Band 5, Dietz Verlag Berlin 1983

- Do.(II/6), Das Kapital. Kritik der Politischen Ökonomie. Erster Band, Hamburg 1872, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: “Das Kapital” und Vorarbeiten Band 6, Dietz Verlag Berlin 1987
- Do.(II/7), Le Capital, Paris 1872-1875, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: “Das Kapital” und Vorarbeiten Band 7, Dietz Verlag Berlin 1989
- Do.(II/9), Capital. A Critical Analysis of Capitalist Production, London 1887, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: “Das Kapital” und Vorarbeiten Band 9, Dietz Verlag Berlin 1990
- Do.(II/14), Manuskripte und redaktionelle Texte des “Kapitals” 1871 bis 1895, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: “Das Kapital” und Vorarbeiten Band 14, Akademie Verlag Berlin 2003
- Do.(II/15), Das Kapital. Kritik der Politischen Ökonomie. Dritter Band, Hamburg 1894, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 2te Abteilung: “Das Kapital” und Vorarbeiten Band 15, Akademie Verlag Berlin 2004
- Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)* (III/4, III/7, III/8), 3te Abteilung, Briefwechsel, Band 4, Januar bis Dezember 1851, Band 7, September 1853 bis März 1856, Band 8, April 1856 bis Dezember 1857, Dietz Verlag Berlin, 1984, 1989, 1990
- Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)* (III/9, III/11, III/12, III/13), 3te Abteilung, Briefwechsel, Band 9, Januar 1858 bis August 1859, Band 11, 1860 bis Dezember 1861, Band 12, Januar 1862 bis September 1864, Band 13, Oktober 1864 bis Dezember 1865, Akademie Verlag, Berlin, 2003, 2005, 2013, 2002
- Karl Marx – Friedrich Engels Werke* (MEW, Bd.31,32), Bände 31-2 Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1965 (Briefwechsel von 1864 bis 1867, von 1868 bis 1870)
- Marx, K. (IV/4), Exzerpte und Notizen, Marginalien, Juli bis August 1845, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 4te Abteilung, Exzerpte·Notizen·Marginalien, Band 4, Juli bis August 1845, Dietz Verlag Berlin, 1988
- Do. (IV/9), Exzerpte und Notizen, Marginalien, Juli bis September 1851, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 4te Abteilung, Exzerpte·Notizen·Marginalien, Band 9, Dietz Verlag Berlin, 1991
- Marx, K., Engels, F. (IV/32), Die Bibliotheken von Karl Marx und Friedrich Engels : annotiertes Verzeichnis des ermittelten Bestandes / Karl Marx, Friedrich Engels, in: *Karl Marx Friedrich Engels Gesamtausgabe (MEGA)*, 4te Abteilung, Exzerpte·Notizen·Marginalien, Band 32, Akademie Verlag Berlin, 1999
- McCulloch, J.R. (McCulloch1845)*The literature of political economy: a classified catalogue of select publications in the different department of that science, with historical, critical, and biographical notices*, London, Longman
- Ricardo D. (Ricardo, IV), An essay on the influence of a low price of corn on the profits of stock etc., London, 1815, in: *The Works and Correspondence of David Ricardo*, Edited by Piero Sraffa with the Collaboration of M. H. Dobb, Cambridge University Press, Vol. IV, 1951
- Do. (Ricardo, I), On the principles of political economy, and taxation, London, 1817, in: *The Works*, Vol. I, 1951
- Rodbertus, J.K. (Rodbertus1851), *Sociale Briefe an von Kirchmann von Rodbertus. Dritter Brief: Widerlegung der Ricardo'schen Lehre von der Grundrente und Begründung einer neuen Rententheorie*, Berlin, Allgemeine Deutsche Verlags-Anstalt
- Schumpeter, J.A.(Schumpeter1954) *History of economic analysis*, London, New York (J.A. シュンペーター

- 『経済分析の歴史（上・中・下）』東畑精一・福岡正夫訳、岩波書店、2005-6年）
- Thaer, A.D. (Thaer1809-12), *Grundsätze der rationellen Landwirtschaft*, Erste Auflage in vier Bände 1809-1812, neue Auflage, G.Reimer, Berlin, 1837（アルブレヒト・テア『合理的農業の原理』相川哲夫訳、農文協、2007年）
- West, E. (West1815), *Essay on the application of capital to land, with observations...*, London (E.ウエスト『穀物価格論』橋本比登志訳、未來社、1963年）

## 2. 日本語第二次文献

- 相川哲夫（相川2007）「訳者解題」（アルブレヒト・テア『合理的農業の原理』同訳、農文協、上巻）
- 飯島充男（飯島2013）「差額地代第二形態の概念と意義」『商学論集』（福島大学）、81巻4号
- 同（飯島2016）「虚像としての絶対地代論」『商学論集』（福島大学）第84巻第4号
- 大内 力（大内1958）『地代と土地所有』東京大学出版会
- 同（大内1982）『経済原論 下』（大内 力経済学体系第三巻）東京大学出版会
- 大村 泉（大村1986）「絶対地代の発見と「資本一般」——『剰余価値学説史』[g ロートベルトゥス氏]と草稿第三章「資本と利潤」との連繫——」研究年報『経済学』Vol.48 No.3. Nov.
- 同（大村1998）『新MEGAと《資本論》の成立』八朔社
- 折原 裕（折原1989）「ロートベルトゥス経済学と絶対地代論」『武蔵大学論集』第37巻第1号
- 加用信文（加用1965）「農業における土地の経済的意義」『農業総合研究』第7巻第1号（同著『農業経済の理論的考察』御茶の水書房、1965年所収、増補版1970年、引用はこの増補版による）
- 同（加用1970）「アンダーソンの地代論に関する書誌的考察」『農業総合研究』第24巻3号（同著『イギリス古農書考』御茶の水書房、1978年、増訂版1989年、引用は後者より）
- 同（加用1972）『日本農法論』御茶の水書房
- 菊池壮蔵（菊池2003）「地代論におけるアンダーソンとマルサス 地代論の系譜に関する一考察」『マルサス理論の歴史的形成』永井義雄他編、昭和堂、2003年、所収
- 久留島陽三・保志 恂・山田喜志夫編（久留島他編1984）『資本論体系7 地代・収入』有斐閣
- 小泉信三（小泉1923）『価値論と社会主義』改造社（『小泉信三全集』第三巻、文藝春秋社、1968年、所収、引用は全集版より）、「第二篇 ロオドベルトスの価値論研究 第二章 ロオドベルトスの地代論とリカルドオ」
- 斉藤幸平（斉藤2014）「マルクスの近代農業批判の成立と抜粋ノート」『唯物論』（東京唯物論研究会）第88号
- 同（斉藤2016c）「『フラス抜粋』と「物質代謝論」の新天地」、岩佐 茂・佐々木隆治編『マルクスとエコロジー 資本主義批判としての物質代謝論』堀之内出版、2016年、所収
- 佐々木隆治（佐々木2016）「経済学批判体系における物質代謝論の意義」、岩佐・佐々木編著所収
- 佐藤金三郎（佐藤1968）『『資本論』と宇野経済学』新評論
- 椎名重明（椎名2014）『農学思想 マルクスとリービヒ』東京大学出版会、2014年（増補新装版、初版1976年）
- 杉原四郎・重田晃一「訳者解説」（杉原・重田1970）（同訳『マルクス 経済学ノート』未來社）
- 竹永 進（竹永2010）「1860年代中葉におけるマルクスの地代論研究——同時期の抜粋ノート、61-63年草稿、『資本論』第3部第6篇の対比による解明——」『経済論集』（大東文化大学）95号（大谷禎之介・平子友長編『マルクス抜粋ノートからマルクスを読む』桜井書店、2013年、収録。第6章）
- 鳥居伸好（鳥居1997）「第六篇 超過利潤の地代への転化」『経済』（新日本出版）1997年5月号
- 羽島有紀（羽島2017）「マルクスの地代論草稿とその射程」『季刊経済理論』54巻2号
- 林 健一（林1973）「絶対地代の名称的根拠」『商経論叢』（九州産業大学）14巻2号

- 羽鳥卓也(羽鳥1982)『古典派経済学の基本問題』未來社  
日高 普(日高1962)『地代論研究』時潮社  
同(日高1964)『経済原論』時潮社  
平瀬巳之吉(平瀬1950)『古典経済学の解體と發展——ロッドベルトゥス批判——』日本評論社(第  
二章 剰余価値の理論 第三節 利潤論および地代論)  
福富正実(福富1989)『経済学と自然哲学』世界書院  
吉田文和(吉田1980)『環境と技術の経済学——人間と自然の物質代謝の理論——』青木書店  
吉田武彦(吉田2007)「解題」(リービヒ『化学の農業および生理学への応用』同訳)

### 3. 外国語第二次文献

- Burkett, P. (Burkett2014), *Marx and Nature, A Red and Green Perspective*, Haymarket Books, Chicago, Illinois, 2014 (originally 1999)
- Foster, J. B. (Foster2000), Marx's ecology: materialism and Nature, Monthly Review Press (ジョン・ベラミー・フォスター『マルクスのエコロジー』渡辺景子訳、こぶし書房、2004年)
- Gehrke C. (Gehrke2012), Marx's critique of Ricardo's theory of rent, A re-assessment, in: *Classical Political Economy and Modern Theory, Essays in honour of Heinz Kurz*, edited by Christian Gehrke, Neri Salvadori, Ian Steedman and Richard Sturn, Routledge
- Howard, M.C., King, J.E. (Howard et al.1992), Marx, Jones, Rodbertus and the theory of absolute rent, *Journal of the History of Economic Thought*, No.14, 1992
- Kautsky, K. (Kautsky1899), *Die Agrarfrage: eine Übersicht über die Tendenzen der modernen Landwirtschaft und die Agrarpolitik der Sozialdemokratie*, Stuttgart (カール・カウツキー『農業問題(上・下)』向坂逸郎訳、岩波文庫、1946年)
- Marx-Engels-Lenin-Institut (ed.) (MEL Institut1934), *Karl Marx Chronik seines Lebens in Einzeldaten*, Marx-Engels-Verlag, Moskau 1934 (M・E・L研究所編『マルクス年譜』岡崎次郎・渡辺 寛訳、青木書店、1960年)
- Pasinetti, L. P. (Pasinetti2014), Sur l'origine de la théorie de la rente en économie, in : *Economie, mathématique et histoire, Hommage à Christian Bidard*, sous la direction de Fabrice Tricou et Danielle Leeman, Presses Universitaires de Paris Ouest, 2014 (originally written in English in 1990, French translation by Oliver Rosell)
- Prendergast, R. (Prendergast1987), James Anderson's Political Economy — His influence on Smith and Malthus, *Scottish Journal of Political Economy*, Vol.34, No.4, Nov. 1987
- Saito, K. (Saito2016a), *Natur gegen Kapital —Marx'Ökologie in seiner unvollendeten Kritik des Kapitalismus*, Campus Verlag, Frankfurt
- Saito, K. (Saito2016b), Marx's ecological notebooks, *Monthly Review*, Feb. 2016
- Schnickmann, A. (Schnickmann1987), Marx' Arbeit über die Grundrente im Jahre 1865, *Beiträge zur Marx-Engels Forschung*, H.23, 1987
- Sperl, R. (Sperl1995), *Allgemeiner Prospekt der Bände IV/10 bis IV/32 (Neufassung)*
- Ternowski, M. (Ternowski1985), Die Agrikulturchemie und die Entwicklung der Grundrententheorie durch Marx, *Marx-Engels-Jahrbuch* 8, 1985
- Ternowski, M. (Ternowski1987), Die erste deutsche Auflage des ersten Bandes des "Kapitals" und das Marxsche Exzerptheft von 1865 bis 1866, *Beiträge zur Marx-Engels Forschung*, H.27, 1989